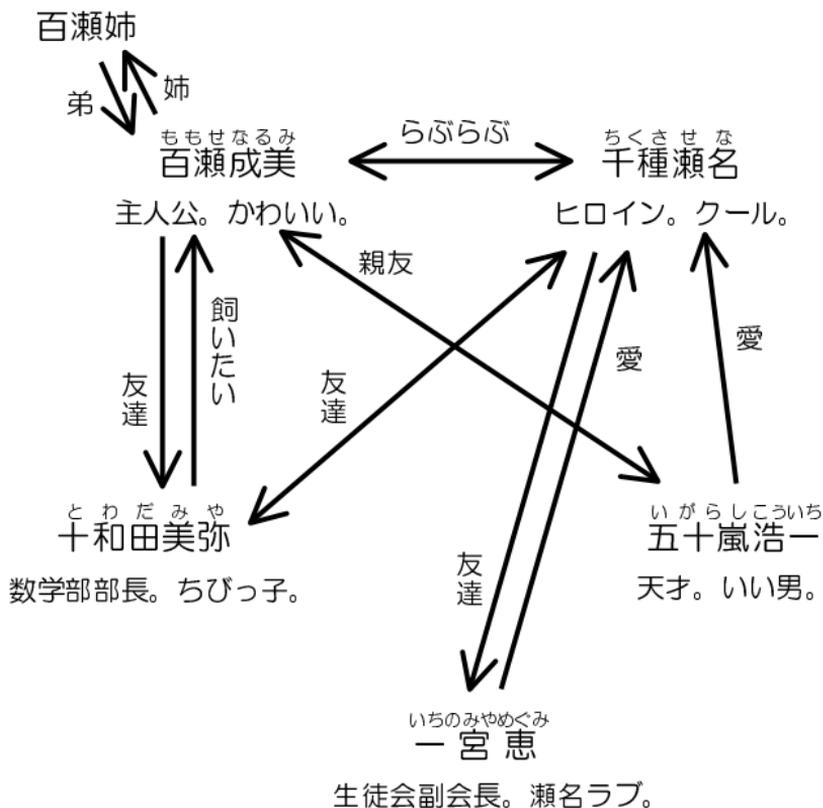


ももせな。アフター
手を繋いで、一步

村人。

三丁目文庫

登場キャラクター



プロローグ 三月十二日 十六時五十分

「おや」

百瀬が発した呟きのような言葉に、周囲も反応した。女子大生二人が、百瀬の視線を追うように喫茶店の窓越しに外を見る。

よく晴れた日だ。厳しい寒さが少しづつ和らいで、ようやく春も近いかと感じるようになってきた頃。街中にある、さしてお洒落でもない、むしろ学生たちがたむろっていて賑やかな喫茶店は、彼女たちがいつも使う店だった。当然、景色自体は見慣れたものだ。

「どしたん？」

視線を追いかけた女子大生の一人が、首を傾げる。ん、と百瀬は短く答えた。

「弟発見した」

「えっ?!? どれどれ?」

「弟って、あの噂の?」

「そんなに噂にした覚えはないけど、あれ。あの、背の高い女の子と二人で歩いてる、その東丘の制服の」

百瀬が説明すると、二人は食いつくように窓側に体を寄せて、じろじろと遠慮無く屋外を眺めた。近くの客も釣られて何人か、外を見た。しばらく探したあと、一人が、あつと声を明るくした。

「あれ? あの子? うわ、なにあれ、可愛いー!」

「う、どれ……あ、あ、もしかして、あれか! うわー、うわうわー、ほんとだ、可愛いじやん! え、あれで高校生なの? まじ? 隣の女の子はすごい大人っぽいのに。アンバ

ランスー」

「あれで高二だ、まじ」

「すげー。そっか、ちっこいのは遺伝だったんだね、よくわかった」

「うっさい。やーあたしが小さいのは認めるが、あいつは一応百六十七あるよ。隣の子が大きいんだわ」

「へー。つてことは女の子のほうは百七十あるんだ。女の子のほうはなんなの？ 彼女？」

「彼女。になったと、少年……つと、弟は言ってるけどねえ。つい最近付き合いましたんだと」

「おー、いいねえ、青春だねえ」

「いや、可愛すぎでしょ、あれ。反則だわー。お姉ちゃんより可愛いでしょあれ」

「あつははーうるさい黙れ」

三人で窓に張り付いて盛り上がる。身内トークだと察して、周囲の客はすでに通常モードに戻っている。中には、まだ三人と同じように外を眺めている人もいたが。

事実、目を引くコンビだった。女性のほうが長身のカップルというだけでもちよつと珍しいが、女性がこれがまた美人であり、そして男のほうも、なんとというか、女子大生コンビが表現したとおり、可愛いと言いたくなるようなオーラをまとっているのだ。

際立って美少年というわけでもない。しかし、一挙一動を眺めていると、やはり可愛いと言いたくなる、そんな存在だった。どこか緊張した表情、ぎこちない手足の動き、なるほどいかにも、まだ付き合いだしたばかりのカップルといった初々しさを感じる。隣の女性のほうが落ち着いているだけに、なおさら目立つ。

「なんか挙動不審だけど、なにしてるのかな」

「ん」

二人は時折周囲を眺めながら、ゆつくりと歩いてた。なにか店を探しているのかもしれない。が、男——百瀬弟のほうは、時折隣の女性のほうを緊張気味にちらちらと覗いていた。顔を覗いているにしては、視線が少し低い。

姉のほうの百瀬は、少しだけ真面目な顔で考えたあと、口を開いた。

「ふん。だいたいわかった」

「まじで」

「あいつら、お友達期間長かったからね。あいつは、付き合いだしたんだからそろそろ手くらしい握ってもいいんじゃないかと思ってるけど踏ん切りがつかなくて、どのタイミングでやってみようか、できるだけさりげなくやりたいって悩んでるわけだ。たぶん、手繋いで歩いとる他のカップル見て、うらやましいと思っただな」

「なにその名探偵」

「初々しい……いい、実がいい」

確かに百瀬が言うとおりに、視線の先は女性の手に向かって見えているように見えた。そう思っ眺めていると、タイミングを見計らっている思考の流れが見えてくるようだった。

やがて二人は背中しか確認できないようになり、喫茶店の窓越しでは見えない場所へと歩き去っていった。少なくとも見えている間には、百瀬弟が行動に出る様子にはなかった。

「ふー」

三人でそれを見届けたあと、一人がため息をついた。窓際から、席に戻る。

「見てるほうがドキドキするね。いいね青春」

「それにしても、凄いいじゃん。弟のことならなんでもわかってる、ってか？」

一人がからかうように言うと、百瀬は軽く手を振った。

「ないない。あいつのヘタレ具合だけはよーわかっているだけだ」

「ねえ、ねえ、友達期間長いって言っていたけど、女の子のほうも知ってるの？」

もう一人のほうはまだ興奮気味に、食いついてきている。隣から、あんたはほんと他人の
コイバナが好きだな、と呆れ気味にツッコまれているが、意に介した風もない。

百瀬も慣れているのか、落ち着いて答える。

「小学校の頃から知ってるからね、幼馴染って言ってもいいんじゃないかねえ。あいつあんまりそんな話せんから、まだ友達やっていると知らなかったけど。この前久しぶりに家に連れてきおって、あんまり美人になってるから驚いたわ。瀬名ちゃん昔から可愛かったけど、さらに化けたね」

「え？ 家に？ え、もう、なに、進んでるじゃん！」

「いや、本人曰くまだ付き合ってた段階で。あのときなにながあつたかは知らんけど、そのあとすぐに付き合うことになったって言ってたからねえ、なんかはあつたらしい」

「なにそれ夢が広がる」

「もしかして、もう、結構やることやっちゃってる……!？」

「そう見えたか？ アレが」

「見えない」

「見えない」

「うむ」

ここは満場一致、文句なし。

7 手を繋いで、一步

「ま、でもお姉ちゃん、ちゃんと気を遣ってあげないといけないねー、今度彼女連れてきたときはちゃんと外出しておくようにね」

「やだ。面白そうだから、あえて隣の部屋に籠ってやる」

「うわ、空気読まない宣言。弟さんも大変だわ」

「変な声とか聞こえてきたらどうするのさ」

「瀬名ちゃんの……うわー全然想像できないわ」

「いや、弟さんのほうの切ない声とか」

「そっちかよ。なんでそっちなんだよ」

「だって……さっきの二人だと、ねえ」

「気持ちわかる」

「そっちはさすがに想像もしたくないわ、勘弁」

「なら、素直に部屋空けておきなさいって」

「あいつらに限って、そんな展開が早々にあるようには思えんからな。……うん、まあ、へタレはともかく、瀬名ちゃんのほうは行動力あるからな、なにやらかすか予想はできん」

「やつぱり、見た目通りの関係なんだ」

「あんま詳しくないけどさ、あたしも」

「百瀬は軽くため息をついて、もう二人がいなくなった窓の外を眺めた。

「だいたい、見てりやーわかるわ」

三月十二日 八時十分

緊張しすぎて、息が苦しい。すでに決まっている結果を確認するだけなので、自分が緊張したところだなにかが変わるわけでもない、わかっているのだが。

めったに使われない、廊下の掲示板。今日ばかりは人だかりができています。

僕も邪魔にならない程度に人ごみの後ろから掲示板を覗く。ざわめき、歓喜の声、ため息。いろいろと聞こえてくる。きつと大学の合格発表なんかだと、これとは比較にならないほどの騒ぎになるんだろうな、などと思ったりもする。そのとき僕は緊張感に耐えられるのだろうか。

などとおそらく約一年先にやってくる未来に思いを馳せつつも、今は、今もつとも重要な事実が書かれている、その数枚の紙に視線を走らせる。

「あつ」

千種瀬名、の名前を、先に見つけた。僕の名前よりも先に。ドキツとする。四文字の漢字を見ただけなのに、そこに重なるように千種の顔が思い浮かぶ。意味もなく、その文字をじつと眺めてみる。文字自体が、特別な力をもっているような気さえしてくる。きつと、特別な名前だから、名前もその文字も特別なだろう。

……うん。病気だな、自分。軽く頭を振って、熱くなっている顔と頭を少し冷やす。舞い上がりすぎだ。千種の名前を見ただけで。

見つけたその名前から、ゆっくりと視線を横方向にスライドさせていく。大事な情報を見逃さないように。千種の名前を見つけた以上は、大事な情報なんて、もはや、一つしかない。

百瀬成美。僕の名前だ。その名前は――

「あ……!!」

今度こそ、小さく叫んでしまった。

あった。確かに、あった。あつて欲しいと思いついていたら、あった。驚いた。え、本当に？ 間違えて下の段を見ていたりしないか？ 驚いて、不安になって、疑ってしまう。

もう一度確認する。自分の名前から逆にたどっていく。千種瀬名の名前にたどり着く。間違いない、同じクラスだ。

三年四組。

念のためもう一度確認して、やっと、確信する。来年は、僕と千種は、同じクラスだ。

「う……わ……つ」

確信すると、急激に喜びが胸の中に広がってくる。

急すぎて、この感情を体がうまく表現できなかったのか、口からは意味のない驚きのような声だけが飛び出した。それに遅れて、頬が自然と緩んでいく。表情が勝手に変わっていくのを止められない。

同じクラス。来年はやっと、同じクラスだ。

千種と同じ教室で勉強することになるなんて、いつ以来だろう。高校に入ってから、もちろん、初めてだ。いや、いつ以来だとか、そんなことは実際あまり重要ではない。重要なのは、つまり、僕たちの関係が変わってから初めてのクラス替えで、見事に、当たったということなのだ。

僕たちの関係が。そう、つまり。

……えつと……うん。つまり、うん。……ああ、ニヤニヤが止まらない。

「嬉しそうだねー、百瀬君」

「嬉しそうというかこれはもう脳内麻薬でヤク中になつてくるくらいの状態だな」

「ひゃっ!?」

後方、左右から声が聞こえた。後方というかも、真横に近いくらいの位置から。かたや低いところから、かたや高いところから。いずれも馴染み深い声だ。

ゆつくりと振り向く。まずは左へ。予め視線はぐつと下げておいて。見慣れた、油断していると小学生と見間違えてしまいそうな立派な高校二年生が、優しく微笑んでいた。

「や、百瀬君はやっぱいいね。気持ち悪いくらいにデレ顔なのに可愛いんだもん」

「う……だ、誰がデレ顔だ……別に、僕は」

「うんうん。照れ隠しなんてしないでいいよ！ 千種さんと一緒にクラスになれるように封禅の儀までやったくらいだし、嬉しいよね」

「どこの始皇帝だよ！ どんだけ大掛かりな願掛けだよ！」

「またまたー」

「またまたーの意味がわからない。本気で」

この見た目は小学生、頭脳は数学博士の彼女は、十和田さん。こう見えて数学部の部長であるだけでなく、数学の成績は全国でもトップクラスというとてもない理系少女だ。

「そうかそうか。ルミはそんなに俺と別のクラスになったのが嬉しいか。俺は悲しいぞ」

一方、右側から聞こえてくる声は、男のもの。今度はこっちかと振り向く。さっきまで下を向いているに等しかった視線が、今度は急激に上がる。百八十オーバーの長身イケメン、五十嵐浩一である。

僕の事をルミと呼んでくるが、もちろん僕は男である。名前が成美だから後ろをとってルミらしい。なぜ後ろをとった。

「いや、もちろん、そんなつもりじゃないけど。そうか、五十嵐は別のクラスになるのか」
「おうおう。お前は千種さんの名前しか見てないから気づいてなかっただろうけどな」
「……」

正直、凶星なのでなにも言えない。

ちよつと、恥ずかしい。でも、以前と違って、なんとなくそんな自分が心地よくも感じてたりするからなお始末におえない。

「くっそ、俺がこんな悲しんでるのにお前はいい顔しやがって。惚れるぞ」

「なんで!？」

「ま、俺も悲しみを乗り越えて祝福してやるさ。おめでとう」

「え？ あ、うん……ありがとう」

「よかったな。一緒のクラスになれるように大好きな二次元絶ちをしただけの甲斐はあったな！」

「だからしてないよ！ なにも！」

「あんまり元気に否定することじゃないけどな今のは」

「……いや……うん……うん」

くそう。なんだ今の罨は。

二次元は別腹です。

「ま、そろそろ情報は十分だろ。教室入るぜ」

「……うん」

このように、弄るだけ弄って当人はさっさとスルーである。いや、続けられても困るけど。実際、千種と同じクラスになったということだけで舞い上がっていて、他の人の名前なん

見ていなかった。いやしかし、リストはまだ見始めたばかりだったのだ。仕方が無いことだ。まずは自分を探さるう。そして落ち着いたら他の人の名前もゆっくり探し始めるというのが当たり前の順番であり——いや、うん。そんなことを全力で主張したところで、はい長文乙、と言われるだけなのは、よくわかっている。

というわけで、僕は大人しく後ろをついていくだけなのだった。

「できすぎだよな」

教室に入ってから、まだ僕の席の隣にいる五十嵐が、言った。

え？ と僕は顔を見上げて、続く言葉を待つ。五十嵐は、机の上に手を置いて、体重を机に預けてきている。ちなみに、また反対側の隣には、ちよこんと和田さんも立っている。今年一年、繰り返し返されてきたような光景だった。クラスの優等生二人に囲まれた凡人という構図である。言っていないかったが、五十嵐はこれで全国でも最上位クラスの天才だ。できすぎというのはお前のことか、と言いたくもなる。

「千種さんと付き合いましたら、クラスも同じになりましたっけ。もしかして先生方も狙ってやったんじゃないか？ お前らの熱さは有名だからな、世界的に」

「世界的に!? ……いや、そこじゃない、そこじゃない。なんで有名なんだよ、誰も知らないだろそんなこと」

「え？ 少なくともこのクラスは全員知ってるし、千種さんのクラスの子もまず知ってるよ。文化祭であれだけやらかしてるから間違いなく有名だよ。大丈夫、百瀬君？ 現実逃避始めちゃった？ また」

「またつて。またつて。以前にもやつてたかのような。いや、だから、そこじゃない。え？ そんな他人のことなんて誰も別に興味ないだろうし……え？」

五十嵐に続いて十和田さんの攻撃。

どのあたりにツツコミを入れればいいのかわからなくて、困る。

——文化祭でやらかした、という件については、あまり、否定はできない。が、やらかしたのはあくまで千種であつて僕ではないのだ。と、いうことに、しておく。その論点にあまり意味はないと知つてはいるけど。

「ま、まあ、千種は目立つからな、確かに」

この点に関しては文句なしに事実だ。本人はあまり目立たないように前に出ないようにと行動しているが、いかんせん、まず、百七十センチオーバーの身長がそれを許さない。加えて——

「美人だしな」

「うん」

「おう。ノートタイムで肯定しやがつて。ルミも成長したな」

「え、あ、いや、今のは反射的にというか、ちょうど考え事をしていたところにはつちりタ イミングがハマったからついとつかうか」

「でも実際、美人だよ、千種さん」

「うん……あつ……うん……」

「もー。百瀬君は口ではなんだかんと言つても体は正直なんだから、無理しないほうがいいよ！」

やめて。その表現やめて。

そしてコンビの波状攻撃やめて。

「ま……まあ、とにかく、とにかくきさ。もし先生が知ってたとしても、逆に同じクラスにはしないって。勉強の邪魔にとかなんとかで」

「俺が先生だったらするけどな」

「どれだけ遠慮無く見せつけてくるのか、見てみたいもんね」

「……」

そんな。見せつけているなんて。つもりは、まったく、ない。……ない。

「どんな楽しいことになるか、見てみたかったな。同じクラスになれなくて残念だよ百瀬君！」

「十和田さんも、別のクラスになるんだ」

「うん。それも、遠くに離れちゃうみたい。百瀬君、離れてもあたしのこととは忘れないでね？」

「これからも、あたしが声をかけたら反射的にびくつと体を震わせて怯えた顔を見せたあと涙目で笑顔を作りながら『おはようございます』って敬語になっちゃう百瀬君でいてね！」

「怖いよ！ なにがあつたのそれ!!」

「これから、あるんだよ……」

「犯行予告!!」

十和田さんの晴れやかな笑顔が眩しい。この笑顔を見ると、まあ、冗談で言っているだけなんだろうな、と安心できる。……安心、できる。できる。できるって。

「それにしても相変わらず千種って呼んでるんだな、結局。そろそろ名前でもいいんじゃないか？」

冷や汗を流していると、それまでの会話が何事もなかったかのように、五十嵐が話題を転換してきた。ちやんと受け答えがしやすいぶん、普通の会話のほうがありがたいのはありがたい。なかなか、答えにくい話題ではあるが。

「……一応、当分は今まで通りって、決めたんだ」

「当分か。タイミングを失わないように気をつけたほうがいいぞ。結婚しても相変わらず名前で呼んでるなんてわけにはいかんだろ」

「けっ……!?!」

あまりに唐突に出てきた単語に、驚いて悲鳴みたいになってしまった。

幸いにしてあまり大きな声にはなっていなかったらしく、周囲から注目を浴びるようなことはなかった。いや、一人二人、ちらつとこちらを伺った男子生徒もいたのだが、僕の顔を見て、ああどうでもいいや、といった感じですぐに興味を失ったという、そんな感じだった。なにも僕が卑屈になつてそう思っているわけではないだろう、おそらく、事実だ。

「け……結婚だなんて、いくらなんでも、飛びすぎだろ」

「考えたこともないか？」

「……」

想像したこともないか、と言われれば、そんなことは、ないのだが。もちろん、結婚なんてステップに到達する前の、色々な段階も。しないはずがない。しない人なんていない、はずだ。

が、なんにしても、まだまだあまりにも先の話だ。そんなリアルな想像などできるはずもないし、するはずもない。そりや、例えばドレス姿だつてまったく想像してみたこともないとは言えないけど、結婚生活ってどうなるんだろうとかどんな家庭になるんだろうとか、そ

の程度は、でもあくまで空想という次元であって、結婚したらどうしようとか具体的にそんな話ができるほど考えるなんて、

「今ルミの頭の中でどんな思考が廻っているか、はつきりと見て取れるな」

「隠し事できないよねー、百瀬君」

「……え、いや……そんなはつきりとわかるほどはさすがに」

「これからこんなお付き合ひしていきたくないなーくらいは考えてるんだよね？」

「……それは、まあ」

「千種さんとえっちなことするのも想像してるんだよね？」

「ちよっ!？」

「ねえしてるの？ 毎日？ 何時くらいに？ どんなシチュエーションがメインなの？ ね

ーねー」

「さて、さてまでまでいきなりなんだこの容赦無い攻めはっ、朝の教室だぞっ」

「ねえこうやって追及されて困りつつも本当は喜んでるの？ 興奮するの？」

「ないっ！ ないからちよっと手を緩めてくれ！ そして五十嵐助けてくれ！」

「さすがに毎日じゃないよな、ルミでも」

「そこじゃないー！ー！ー！」

全国の教室の皆さん朝から騒がしくてほんとすみません。

と思つたらもう誰もこつちのこと別に見ていないし。慣れきっていらつしやる。最初からまったく気にしないのはよく訓練されたクラスメイトだ。

ぶーん、と。そのとき、ポケットの中で携帯が震えた。

お、と思つてポケットに手を入れて、掴む。タイミング的に、相手と内容について期待を

持ちながら。僕が携帯を取り出すと、五十嵐と十和田さんは二人して一度見つめ合ってから、にやりと笑った、ように見えた。お前ら息合はずぎだ。

メールが届いていた。期待通りの相手からだった。開くまでもなく、プレビューで十分収まる文字数のメッセージが書かれていた。

『やったね』

感嘆符も絵文字もなく、それでいて伝えたいことはしっかりと伝えてくるシンプルな四文字。まさに千種である。

やばい。これが嬉しすぎて、どうしてもやけるのが抑えられない。絶対に目の前の二人になにか言われるとわかっているのに。いや、見ないようにしよう。気づかないようにしよう。今は画面にだけ集中して。返事も送らないといけないうし。

「僕も嬉しいよ。愛の力の勝利だね」

「これはもう運命としか思えない。結婚しよう」

「その二人うるさいっ！ 勝手に返事を考えるなっ！」
はい。

僕にスルースキルなどかけらありません。

二人の顔を意図的に視界から外しつつ、手早くボタンを押していく。僕も、あまり長いメッセージを書くほうではない。というより、千種に引きずられて短くなる。素直な気持ちを書いて、送信。

「ねーねー。なんて書いたと思う、五十嵐君？」

「短かったな。千種さんのメールもいつも短いからな、たぶんルミに対してでもそこは同じなんだろう。で、ルミは相手に流されやすいから自分も短くなる。ただでさえ同じクラスにな

れてうれいしところにメールまで来て舞い上がってるから本当は長文を書いて全部伝えたいところを我慢しながらだ。まあ、俺たちに見られているのがプレッシャーになってたというのもあるだろう。もし横から途中で覗かれたらと思うと下手なこと書けない。——そうだな、選ぶなら『嬉しいよ』の一言だ」

「ほうほう」

「……」

……くそう。

なんか、こう。

くそう。

三月十二日 十六時

将来か。結婚はともかく、近い未来のことは、もちろん考えないといけないことはたくさんある。つい先日、希望進路調査を提出したばかりだ。

東丘高校にとつて、希望進路とは事実上希望大学調査である。就職という選択肢は、ほとんど家庭の事情がない限りはまず考えられない。県立高校らしいというか、希望される、そして実際に進学する大学は国公立大学が中心である。海外の大学も毎年何人かは行っている。すごい勇気だと思う。

どこにするかを決めるに際して、まず大きいのが、地元に残るのか、遠くに出るのかとい

う点だ。

「どうしたの？ なにか難しい考え事？」

昼間の会話を思い出しながら歩いていると、隣を歩く千種がいつの間にも横から顔を覗き込んできていた。ああ、いや、と反射的に答える。「いや」と「別に」を使い過ぎだ、と五十嵐にはよく言われるものだが、癖というのはなかなか治らない。今も、自分で答えてから、またやってしまった、と気づいた。

「そんな、難しいことじゃないんだけど」

「そうなの？ 小早川秀秋が本当に裏切っているのかどうか迷ってるときみたいな顔してたけど」

「見てたかのような!? いや間違いなく相当深刻な顔だろうけどさっ」

友達がそんな顔をしていたら、むしろ声をかけていいかどうか迷う。

学校からの帰り道。もはや日課となっている、千種との二人での下校。昔からちよくちよくあったことだが、付き合い始めてからは基本的に毎日だ。付き合い始めた、と言っても、それまでの期間が長かったこともあって、実のところあまり劇的になにかが変化したわけでもなく、適当に雑談していたり、二人とも黙って歩いていた、そんな感じだった。もちろん会話の内容も、なにより心中も、以前とは確実に変わっていたのだが。

「いよいよ受験生になるんだなって実感して、それで、進路のこと考えてた」

「なるほど。今日は真面目なほうの百瀬なのね」

「一応、僕は一人しかいないはずだからな」

「えっ」

なぜそこで驚いた。

とかいうか真面目じゃないほうの僕はいつなんだ。特に心当たりがない。いつも真面目です。ほんと。僕が知らない別の意識が存在しない限り。

「大学選びで、実際、人生変わるからな。そりゃ悩むよ」

「そうね。生涯収入のことを今から考えておくのは大事なことね」

「……う……うん」

いきなり収入の話まで飛ぶのかよ、とツツコみたくなったが、最終的にはそこにたどり着く話であるのは間違いないので、戸惑いつつも領いておく。千種の人生設計の基準が収入であることは、なにも最近になって知ったことではないわけで。

「千種は、地元なんだよな」

「うん。東京出るほどの動機は別にないし」

「かもなあ」

地元とは、名古屋市内、あるいは名古屋周辺の県内というくらいの範囲だ。実際、頂点を狙いに行くか、少し珍しい学部学科が狙いというのでもない限り、名古屋周辺の大学でほぼ事足りる。僕や千種みたいな、学年真ん中あたり、という成績では。逆に上位二割くらいまでに入っていれば、名古屋市内にはまず留まらない。

僕自身、とりあえず理学部か工学部だろうなあという漠然とした考えしかなく、成績もあまり振るわないので、名古屋を出るための大きな動機は特にない。

「どっちかかって言うと、一人暮らしをしたいかどうか、じゃないかしらね。名古屋を出るとしたら」

千種が言う通り、僕くらいの成績だと、むしろその観点で学校選びをする人も多い、と思

う。

「一人暮らしか……」

「私はあるまり興味ないわね。お金かかるし」

「千種ならそう言うだろうなという言葉だな」

「話聞いてると、色々と楽だったたり便利だったたりすることもあるみたいだけどね」

「便利……か」

「便利さについては、考えなくてもない。外出とか帰る時間とか行き先とか、なにも気にしなくていいというのは間違いない便利だろう。もちろん、誰を連れてきても。」

すでに千種は僕の部屋まで来たこともあるし、家族全員がそのことを知っている。あまり気にしなくていいのではないかとも思うが、とはいえ、やはり家族に伝えないといけないというだけでも気が進まないものだ。受験生だから、というのもあるのだが。一人だったら、そんな気苦労はない。好きなときに家に、部屋に上げることができたらうし、時間をあまり気にする必要もないし、いつ誰が入ってくるかわからないしどんな会話を聞かれるかわからないという緊張から解放されるし、もちろん、なにをしても気兼ねする必要もなく——

「そうね、百瀬が今考えてるような意味で便利ね」

「!?」

「ちょうど思考が危ない方向に行きかけたところで、冷静な千種の言葉の割り込みを受けて、それ以上の深化は停止する。」

「本当に考えていたことを読まれたような気がして、ドキッとした。本人を前にして下心全開の思考である。いやしかし、いくら僕が表情に出るほうだと言っても、さすがにそんな具体的な」

「でも心配しなくても、私は家族がいても平気でお邪魔できるわよ」

「エスパーか……」

「私的には、表情だけでそこまで詳細を説明してくれる百瀬の器用さに感動を覚えるわ」
もちろん、感動など微塵も感じられない口調で言うのである。

「いったい僕はどれだけ顔の変化があるのか、自分では見たことがないからわからないのだが、神様も実に無駄で邪魔な特技をくれたものである。……だが、まだ、焦る必要はない。そこまで変なことを考えていたわけではないのだ。家に遊びに来る話なんて、当然、あつてもいいことなのだ。僕たちは、その、恋人、な、わけだし。千種瀬名は、僕の、彼女、な、わけだし。」

……
「なんで、単語を並べてみただけなのに、こんなに恥ずかしいのか。」

「いまだに実感できないというわけではない。僕たちは、付き合っているのだ。なのに、心の中で思うだけでもなぜか妙に恥ずかしい。今までずっと、あまりに長い間、微妙な距離の友達関係が続いていたせいかもしれない。はたして千種のほうはどんな感覚なのか、これは僕にも想像がつかない。客観的に見て千種のスペックの高さは間違いなく事実であり、そんな千種とこんな僕が恋人関係だなんて、本当にいいのだろうかと思つたことも、ないわけはない。が、そんなことを言ったら千種はたぶん、くだらないことを、と一蹴するだろう。釣り合わないという思いがあるなら、僕のほうがしつかり千種に見合うような男になればいいのだ。どうすればいいのかわからないけど。でも、そうすればきつと、堂々と、千種瀬名の彼氏です、と名乗れそうな気がする。……彼氏という響きが、やつぱり、かなり、恥ずかしい。うう。」

色々な思いが入り交じって、脳内では話がどんどん脱線していく。もともとなんの話をしてきたか、忘れそうになってしまふ。話の軌道修正をするのは僕の役割だったはずなのに、僕が脱線してしまつてはどうしようもない。

……ええと。

「……千種はやっぱり、行動力が凄いな。僕には、千種の家遊びにいくなんて、ちょっとまだ、無理だ」

「そう？ 怖がらなくても大丈夫よ。上納金なんてめつたに取らないから」

「そんな発想自体まったくなかつたよ！ たまに取るのかよ！」

……うん。こうだ。僕のほうが外れかけた道を戻す役割じゃないと。

「そうじゃなくて、やっぱり、親とかさ。家に行くつてことは、言うなら鑑定される覚悟を決めたつてことに、なるわけだし」

「大げさね。別に両親がなんと言おうと私には百瀬だけなんだから、もし文句言われたりダメだしされたりよくて四十八点くらいだと採点されたりまあ努力賞くらいは認めてもいい程度だなんて言われたりしても、そんなものは関係ないわ」

「そこまで細かく例えていただかなくてもよかつたんですけどっ」

だから、頻繁に道をそらされても、こうして僕が戻すから。……だから、心臓が跳ねるようなことをさらりと言わないでください。こういうのはすぐに顔に出てしまうというのは自分でよくわかっているから。静まれ自分の心。

よせばいいのに、ちら、と隣を歩く千種の顔を覗いてしまふ。

千種も僕の顔を見ていた。薄く笑つた、ような気がした。バレている。絶対にこればれてゐる。赤くなつてゐるの。悔しい。

「それに、心配しなくてもお父さんもお母さんも怖くはないわよ。新選組で言えば永倉」
「新選組で例えられた時点で十分怖いよっ！」

「ついでに誰なのかどんな人なのかも知らないよ！……日本史はあまり詳しくないのだ。でも確かに、大学生になるまでは、控えたほうが無難かもね。勉強もしないで遊んでると思われるのは心外だし、いちいちそれに弁解するのも面倒だし。あんまり堂々と反論できる成績じゃないし」

「……うむむ」

急にリアルな話に戻ってきた。まことに、その通りである。トップクラスだったらもうちよつと自由だったのだろうか。無駄な想定だけだ。

受験生である。どうしても大学受験のことは意識して過ごさことになる。

大学は——色々と悩んだりはあるが、結局は、千種と同じところに行ければと思っている。できれば——結構頑張らないといけないが、目指せ名大である。地元の大学といえば、やっぱりまずはここだ。近いし。自宅からの距離で言えば、東丘高校よりも名大のほうが近い。それは、千種も僕も同じだ。

大学生ともなれば、きつともつと堂々となれるのだろうか。たぶん。大学生活は楽しそうだと、姉を見ていると、思う。できればすんなりと一年であの世界に行きたい。もちろん、千種と一緒に。

もちろん、同じ大学に行ったとしても、文理が違う時点で実際には別々のところに通っているのと大差はないのかもしれない。サークルだつて違うかもしれない。千種はまたバスケットだろうか。

大学生活を想像してみると、少し不安になることもある。当然、また新しい出会いがたく

さんあって、人間関係が構築されるわけだ。大学生となるとどうにも軽いイメージがあるだけに、心配になる。いや、千種が他の誰かになびくなんて心配をするわけじゃない。ただ、色々想像してしまうわけだ。

千種は美人だ。文句なしに。狙われないはずがない。

そして、千種は、この長身と一見冷たそうな顔という外見に反して、恐ろしいほどの無抵抗主義である。面倒なことになりそうだと、こじれると嫌だと思うと、どんなことでもまずは我慢してしまうのだ。これが怖い。どこかの軽薄な男が気安く体に触れたりなんかして、千種は困りつつも断り方も知らないしとりあえず諦めてくれるまで我慢して、そうすると男は受け入れてると勘違いしてさらにエスカレートしたりなんかして――

『瀬名ちゃんっていうんだ。かつこいい名前で、よく似あってるよ』

『……』

男は軽い調子で言いながら、視線はきつとちらちらと胸に向かっているんだ。千種は感情をほとんど顔に出さないから迷惑だなど思っても男は気づかないで、隣に座っていきなり肩を組んだりするんだ。

『……っ』

もちろん嫌がる千種、でも、震えるだけでなにもできなくて、男は「これはいける」と判断してしまって、本気で口説きだしたりして、いや、さらに念押しで酔いやすいお酒なんて飲ませたりして、千種もだんだん意識がおかしくなってきた。

『ん？ 瀬名ちゃん、気分悪いかな？ 送っていくよ、一緒に帰ろうか』

『……』

千種はもうぐったりしてて抵抗できないで――

……つて、あほか！ あほだ！ 僕が！

なんで自分の想像でこんなに気持ち悪くならないといけないのか。いやしかし、下手をするとそんなことだつて本当にあつてしまうかもしれないわけで。

ぎゅ。

想像が変な方向に進んで、思わず拳を思い切り強く握りしめていた。許せない。ああ、絶対にそんなことは許せない。うん、やっぱり、そんなときこそ僕が守らないといけないのだ。

大学生ともなれば、色々とありそうな気がする。将来どうこうという以前に、あんまりもたもたしている、下手をすると、僕もまだしていないことを、誰ともわからない男に勝手に先を越される恐れだつてあるのだ。偏見かもしれないけど。

「なんか脳内ドラマが展開して発散してるみたいだけど、大丈夫？ 一回シャツダウンする？」

「……デフラグくらいでお願いします」
シャツダウンはされたくないです。

そうだ、想像して震えている場合ではない。大切なのは今目の前の千種を守ることだ。そして、できるなら、将来なんて漠然としたことばかり言つてないで、少しづつ、もつと恋人……らしいことが、できれば。いいなと。思うのであります。

もうすぐ駅に着く。このあたりまで来ると、近くの大学の学生らしき姿も増え始める。今まであまり気づいていなかったが、意識して見てみると、カップルというのは思っていた以上に、多い。……あまり気にしたくはないのだが、やはり、僕たちみたいに、女性のほうが

背が高いカップルというのは、ほとんど見ない。それでも絶無ではないあたりに、わずかな救いを感じる。どうか姉弟とかではありませぬように。

——ふと、むしろ、僕たちがちゃんとカップルに見えているのだろうか、と疑問に思う。あまりに今までと変わらないので、感覚がわからない。以前は付き合ってるように見えるなんて間違いだ、友達だ、とよく主張していただけに、今になってちゃんと恋人同士として見られたいなんで、自分勝手もいいとこだなと思う。思うものだが、これが素直な気持ちだった。

周囲のカップルを見渡してみると、なるほどと思う。まず自信を持ってカップルと言える人たちは、そう、手を繋いで歩いてきた。これなら間違えようもない。付き合い始めた頃から、懂れていたことではあった。

手を——

さりげなく千種の手のほうを覗つてみる。僕から近い方の手は、空いていた。カバンは、反対側の手で持っていた。

遠い将来どうこう言う前に、まずは、ここから進めたらいいなど。

思いながら、もちろん唐突に手を握るなどという勇気のない僕は、そのまま普通に歩いて地下鉄のホームへと降りていくのだった。

三月十二日 十六時三十分

「やあ、五十嵐くん。来年は同じクラスみたいだねー、よろしく」

「お？ そうなのか、副会長。よろしくな」

「よきにはからえ」

玄関に向かう途中の五十嵐に声をかけてきたのは、このところなにかと縁のある女生徒、一宮恵だった。五十嵐の中ではまず千種のクラスメイトであり友達であり、そして生徒会副会長である、という認識である。

「いやー、五十嵐くんがクラスメイトだっていうのは心強いね。わからないところがあつたら、すぐに教えてもらえるねー」

「なんでもわかるわけじゃないけどな。ま、程々に使つてやつてくれ」

「わーい。頼もしい」

一宮は、びし、と親指を立てる。

「代わりにせなの妄想漫画ならいくらでも描いてあげるねー」

「……漫画描くのは知ってたが、ナマモノもありなのか」

「ナマモノだけど、私はせな専だよ。誰でもってわけじゃないのです」

誇らしげに胸を張つて、言う。五十嵐にはその誇りの意味がよくわからなかったが、とりあえず漫画界というのはこだわりの世界なのだろう、と思つておくことにした。

「五十嵐くんはこれからお帰りかな？」

「おう」

「じゃ、一緒に帰ろー。そして濃厚なせなトークを繰り広げよう、同志」

一宮の言葉に、苦笑いを軽く浮かべる。

「ほんとに好きだな、それ」

「んー？ もちろんだよ、五十嵐くんだってせな大好きでしょ？ 隠してもわかるんだから。あ、なに、それともうもちーが持ってたから興味ないっていうのー？」

「いや、そういうわけじゃないけどな。——ま、とりあえず、帰りながら話すか」

「おー」

「で、実際どうなのよー。五十嵐くん、実はまだ割とせなのこと狙ってたりする？」
じつと目を覗き込んでくるかのように、一宮は言う。

学校からの帰り道はまだ始まったばかり、校門を出たばかりだ。

「いや」

五十嵐は、迷わず答えた。

「完全に吹っ切れてるさ。千種さんが幸せそうだしな、それを見るほうが俺も幸せだ。俺がいまさらまた動いても、誰も得しないさ、俺もな」

「ふむむー」

一宮は、ま、そうだろねと言ってから頷いた。

「意外とあっさりした反応だな」

「私は誰よりせなのことを知ってるからねー。もちーがうまいことせなをゲットしてからは、せなは前までよりずっと輝いてるもん。前までどっか、無理してたのかもしれないね。もちーがちやんとせなを捕まえてくれたから、せなもやつと心落ち着いたって感じだし」

「そうだな」

一宮の指摘は、そのまま五十嵐が感じていることでもあった。千種と親しい者であれば感じる変化だろう。決して目に見えて表情が豊かになつたとか、よく喋るようになったとか、わかりやすい変化があつたわけではない。どこか柔らかくなつた、という、漠然とした微妙な違いでしかない。だが、千種のことを気にかけている二人にとつては、当然気づくべき差だつた。

「残念だけどね、やっぱりあれ見ると、せなにはももちーしかないんだなーって思うよ」

「だな。もともと縁がなかつたんだ」

「でも、せなに目をつけるなんて、わかつてるね五十嵐くん。せなほどできた女はそういないからね。理想が高くなつちやつて、大変かもよ。五十嵐くんなら、よりどりみどりかもしれないけど、ん、ん、でも、なんとなくだけど、五十嵐くん、結構、せなみたいに手が届かないところにいる子ばかり興味持ちそうな気がする」

「……そうじゃないことを祈りたいな」

苦笑いを浮かべつつも、はつきりと否定はできないな、と五十嵐は思うのだった。

最初は、一目惚れだった。千種を気にする男の大半がおそらくそうであるように。多くはおそらく彼女の身長を考へて諦めたことだろう。その点、百八十を超えている五十嵐は、自分分問題ないと考へた。この高校に入学して、まだ間もなくの頃だった。

バスケをやっている彼女は、まさしく輝いていた。ただ純粹にかつこよかつた。美しかった。どんな状況でもほとんど表情を変えないのも、クールで素敵だと思つた。機会があれば彼女の姿を眺めていたが、その言動を見るたびに、ますます好きになつていった。

もちろん、百瀬成美の存在はすぐに知つた。というより、まず百瀬が同じクラスであり、

百瀬に会いに教室までやってきた千種に出会ったのだ。五十嵐にとつて、最初からこの二人はセットだった。百瀬は当初から、付き合つてなどいないし、そんな気もないと言つていたが、千種のほうは二人の仲について強く否定することはなかった。五十嵐から見れば、二人とも十分に互いのことを想ひ合つていた。

振り返つて考えても、最初から届かない相手だとわかりきつていたのだ。

で、あるにもかかわらず、告白して、振られて、なお、まだ完全には割りきれていなかった。隙のないスペックから当然のように何人もの告白を受けてきた五十嵐だったが、そのことごとくを断つていた。百瀬と一緒にいることが多かつたためか、男にしか興味がないのではないかと噂されていることも知つていた。というより、百瀬に本気なのではないかと真面目に言われたこともある。先日のバレンタインに半分嫌がらせで百瀬にチョコレートを渡したりしているのが、また噂に信憑性を持たせているわけだが。

まつたく、救われぬ。千種のことはずつぱりと諦めた五十嵐だったが、さりとて他の誰かに興味が移るわけでもなかった。

「あーあ、わかっちゃいても、悔しいのは悔しいなー」

五十嵐以外にももう一人、似たような存在がここにいた。

一宮は、くつそーと拳を振り上げて、叫ぶ。

「ももちーめ、うまいことやつたなー」

ゆつたりとした口調のため、迫力はまつたく感じられないが、心がこもつていことはよくわかる、そんな話し方だった。

手をわきわきと動かす。

「せなのおっぱいは私専用だったのになー。私だけの特権だったのになー。もう揉みしだい

てるのかなー、ちくしょー」

「……おい」

「あの奇跡的なサイズと柔からさ……たまらん！ たまらんのですよ！ くつ……まだ手があの感触を覚えている……やめてやめてと言いつつもなんだかんで好きなようにさせてくれてたのに」

「おいやめる。一応ここは公衆エリアだ、というかそれ以前に男の前だということを忘れてないか」

「くつくつく、男の子はやっぱ純だねー。でも本当はうらやましいでしょ？ うらやましいでしょ？ ふふ、あの柔らかさを知らぬ者に人生の甘みさはわからぬ……」

「いいからちよつと落ち着け、頼む」

「ねえ五十嵐くんはどう思う？ ももちーはもうおっぱいしてるかな」

「話聞く気ないことだけはよくわかった。……ま、いや、あれだ。そのあたりは、あの二人を、というかルミを見ていればわかるだろ。あれはたぶんまだ手も繋いでないぞ」

「おっぱいはー？」

「もうその単語やめろいややめてください」

寂しそうに下を向きながらも、手は相変わらずなにかを驚掴みにするような仕草を続け、一宮はむうと唸った。

「ももちーの我慢力は仙人クラスだよ……」

「我慢っていうかあいつは……なんというか、奥手だからな」

「奥手と書いてヘタレと読む」

「言うな。あえて言わなかったんだから言うな」

「うひひ」

一宮は、そーだよねー、と言つて笑つた。もちーがまだそこまでいつてるわけないもんね。どちらかといえば、満足そうに。

「とはいえ、なんにもおきないつてのも、それはそれで寂しいからねー。せなには色々吹き込んでるけどね、ひひ」

「……あんまり千種さんと遊ばないでやってくれ」

「大丈夫だよ。どっちかといえばもちーで遊んでるから」

「それなら、よし」

話はここにまとまった。

その後も二人で千種について語りながら、駅までたどり着いて、別れる。それぞれ違う方向で千種を愛する者同士、話すことは色々あった。

千種を本当に想うがゆえに、結局二人とも、百瀬の背中を押さずにはいられないのだと話しながら実感するのだった。

三月十三日 十五時三十分

土曜日である。

多くの東丘生にとって、土曜日とは学校の代わりに塾に通う日である。塾に通わないのは、土日も部活の練習がある人か、通信添削でやっている人か、まったく通う必要がない人とい

った感じだ。部活をやっていない人だと、平日、学校の授業が終わってから毎日通っている人もいる。

部活をやっていない僕は、土曜日は人並みに塾に通っていた。平日はさすがにやっていない。千種とのバスケット練習もあったし、一応家でもちゃんと勉強はしていた。

終わったときはだいたいもうヘトヘトである。学校の延長のようである。学校と比べても気分転換になるものがない。なかなか、きつい。とはいえ塾の勉強は学校での勉強よりもまだ面白いものが多いのが救いだった。最初から受験をターゲットにしている、学校みたいないろんな制約がないからなのだろう。だからといって疲れないわけではないのだが。

なお、千種はここには通っていない。

帰りにコンビニに寄って、買い物ついでに雑誌を立ち読み。かつてはまったく縁がなかった、近隣エリアのグルメ情報なりデート情報なりが充実している雑誌である。塾帰りの気分転換でもあり、割と本気で情報収集でもある。

読んでみるとこれがなかなか面白いもので、とりあえずここに行く機会はそうそうないだろうなと思うような場所も、紹介されているとなんとなくわくわくしてしまう。非日常体験というものかもしれない。

こんなところデートしてみたら盛り上がるかもしれないなとか、千種も喜ぶかなとか、むしろ自分が行ってみたい場所だなとか、色々。ただ、想像はしてみるものの、千種が喜んでしゃやいでいるシーンというのは、どうしても想像できなかつた。難易度極大である。どこに行ってもすまし顔が崩れるような気がしない。

とりあえず、とりあえず。そう例えば夜景を眺めながら、いい雰囲気になったところで、

さりげなく、手を取って——

ぎゅ、と、前触れ無くさりげなく、千種の少し後ろから手を握る。

千種は少し驚いた顔をしてから、僕のほうを振り返る。僕たちは見つめ合う。お互いに微笑み合う。そしてなにも言わず、千種も僕の手を握り返してくれる。

『……千種の手は、温かいな』

『百瀬の手は、冷たいのね。——寒い？』

『ううん。温かいよ。千種が、側にいてくれるから』

『そう』

短く答えて、千種は嬉しそうに笑う。夜景よりもずっと綺麗な笑顔。ドキツとした僕は、この動揺を悟られないように、ごまかす。

『それに、手が冷たいのは、心が温かいからだよ』

『筋肉の不足か血の巡りが悪いか、食べ物が悪いんじゃない？』

『あ……はい……うん……』

「……ってなんで妄想の中でやり込められてるんだよ！ 自分！」

「なにになに？ 妄想？ いやらしい妄想？」

「違うからっ！ 全然そんな……」

ぎぎぎ。それはもうスロー再生のように、首をゆっくり回す。

や、と手を上げている、小学生のような高校生が、そこにいた。満面の笑みを浮かべながら。

僕が次の言葉を告げる前に、十和田さんは僕の手元の雑誌を覗き込んでいた。反射的に隠してしまいたくなるが、隠してもあまり意味がない。むしろ、逆に変に好奇心を刺激してしまいたい。ぐっと耐える。

ちえ、と十和田さんは少し残念そうにこぼした。

「えっちな本じゃないのか。残念だな」

「なにが残念なのか」

「もう、百瀬君、ここは空気読んで、健全な学生は本当は読んではいけない本を読んでくれないと。そしたらあたしがそれを見つけて、しっかりと弱みを握れるのに」

「えっなんかすごく理不尽な怒られ方してる……」

「こういうところで弱みを握ったことから、あたしたちの関係は一変するんだよ。普段の生活が続いているように見えて、実は影ではあたしに隷属している、そんな胸キュンの関係が構築されるせつかくの機会だったのに」

「ときめかないからねっ!？」

「またまた。百瀬君の本当の望みはあたしだけが理解してるんだよ。千種さんと恋人関係を続けながらも、誰よりも本当の自分を理解してくれる、そして誰にも言えない性癖を満たしてくれるあたしから離れられない、そんな複雑な関係……ね？」

「ねって言われても」

だからこの子どもまで本気かわからなくてこわい。

……いやまあ、千種も、どこまで本気かまったくわからないタイプなんだけど。

だいたい僕にそんな隠さないといけないような趣味はない。

……

ない。あんまり。

「でも、珍しいもの読んでるね。デートのリサーチかな？」

「あ……うん。まあ、そんなところ。あと、ついでに、ホワイトデーのお返し、なんかヒン
トないかと思つて」

「んー？ 明日だよ、ホワイトデー。今頃確認なんだ？ 大丈夫なの？」

「あ、いや、千種のぶんは、もう準備してあるんだけど」

「ふむふむ。当然じゃないかコノヤロー、と言わんばかりの勢いでなにより」
「……どうも」

そんなに激しく反論したつもりは、ない。

なんかすごい顔してたのかなと不安になつてしまう。

「ん？ てことは、他の誰かつてわけで、つまり、あたしへのお返しのことかな？」

「……うん。あと、一宮さんと」

「あたしは百瀬君の体で払つてくればいいよー」

「重いから！ 重いし怖いからっ！」

キャンディよりそつちのほうが安いでしよ的なノリで言われても。

だいたい体で払うつてなんだ。十和田さん、というより十和田さんが部長をしている数学
部には前科があるだけに、もう嫌な予感しかない。更衣室と衣装と撮影用機材が地味に揃
いつつあの部室は、もはや一目見て何部なのかまずわからない。

「大丈夫だって、百瀬君可愛いんだから」

「なんのフオローなかわからない！？」

「明日は休みだから、明後日で大丈夫だよ。放課後、部室によろしくね」

「問答無用きたよこれ……」

そんなに目を輝かせられなくても。

……めちやくちや可愛いから、困る。これが。反則だ。

「ど、どっちにしても、明後日はダメだよ。千種と約束があるから」

ホワイトデーのお返しは、千種が好きな店で好きなケーキを食べてもらおうと決めている。少々高くつくが、あの幸せそうな顔を見られると思えば、安いものだ。

「じゃ、火曜日でもいいよ」

「……」

逃げられなかった。

「でも、デート情報探しに雑誌を使うなんて、意外だね。ネットで済ませそうなのなのに」
「うん、情報量としては十分なんだけどね。ただ、雑誌のほうが写真とか細かい説明とか多いから、なにかヒントにならないかなと思って」

「ヒント？」

「あ……うん、まあ」

うっかり喋りすぎてしまう。余計なことを。

……しかし、まあ。考えようによつては、雑誌よりもさらに、実際に女の子に話を聞くほうが、情報としてはより直接的である。十和田さんがその相手として適切かどうかは、……ちよつと、疑問ではあるが。貴重な女の子の知り合いで、しかもこの手の話ができるほぼ唯一の相手という意味では、確かに条件は完璧である。

一度興味を持たれてしまうと、いずれにしても色々聞き出されてしまうに違いないわけ

で、それならば必要以上に深く詮索される前に、自分から切り出してしまってもいいかもしれない。

「悩んでいるんだ。千種が喜びそうな状況というか、いい雰囲気になるためにはどうしたらいいのか、いまいち想像できなくて」

例えば、ケーキをおごつたら喜んでくれることは間違いない。それはもう迷わず断言できる。しかしそれは、特別いい雰囲気になる世界とはまた別物だ。急に手を握りにいける空気ではない。

ムード、というやつだ。今までの人生であまりに無縁すぎたせいで、まったく想像がつかない。

十和田さんは、首を傾げて、んーと言った。

「つまり、なにかやりたい下心があるから、その雰囲気を持ち込みたいってこと？」

「……えー……いや……まあ……うん、そう、なんだけどさ……」

もう少し言葉を選んでいただきたかった。

なんで胸が痛いのか。

「そりや、もう、部屋で。百瀬君の。秘密の」

「なんか余計な修飾語がついた」

「だって、初めてから外ってわけにもいかないでしょ、いくら百瀬君でも」

「念のため言っておくけど、手を繋ぎたいだけだからねっ！」

いくら百瀬君、のところはスルーしておく。ややこしくなりそうなところなので。

「手……手って、なんの隠語？」

「そのままの意味で！ 深読みしないっ！」

「まだ、手も繋いでないの？ そんなの、一言言えば繋がせてくれるでしょ。最悪、土下座すれば」

「……いや、土下座しなくても、大丈夫だけども」

もちろん、そんなことは言われなくてもわかっている。お金を要求されることはあっても、断られる可能性はゼロだと断言していい。お金を要求されることはあっても。

それは僕の自信過剰というわけではない。千種は、拒まない。これは千種の性格の問題だ。だからこそ、出来る限り自然な流れにしたいのだ。千種が無自覚に溜めてしまうであろう痛みや疲れを回避するためには、僕が十分に気をつけないといけない。僕が千種を守らなければ、他に誰も——千種自身も、千種を守らないから。

「百瀬君は、また複雑なこと考えてるんだねー」

自分に言い聞かせるように、その考えを心の中で反芻していると、十和田さんのんびりした声で割り込んできた。表情は、さつきまでより真面目だ。まさか、こんな考え事まで顔に現れているのだろうか、僕は。

「手を繋ぐなんて、千種さんだって嬉しいに決まってるよ」

「……そうかな。言い切れるほどの自信はないけど」

「不思議だね。付き合う前からあれほどのラブラブっぷりを見せつけておきながら、こんなところで迷うなんて。はっきり言っておくけど、失礼だよ？ 千種さんに。千種さんの気持ちのまつすぐさを疑ってるみたい」

「そんなつもりはないって。まつすぐすぎるから、心配なんだよ」

「百瀬君、恋人じゃなくてお母さんみたい」

少しつまらなさそうに、十和田さんが言った。

恋人じゃない、と言われたのは、割とずっしりと響いた。そうなのだろうか。無駄に心配しすぎなのだろうか。……とりあえず、せめて、お父さんにしてほしかった。いや問題がそこではないのは知っているが。

うーん、と、十和田さんは目を閉じて、なにか考えこむ、ような仕草を見せた。

「千種さんはもつとぐいぐい押しして百瀬君をリードしそうな気がしてたけど、そうでもないんだね。確かに、それだけ押せるなら、誰がどう見ても相思相愛なのに百瀬君が自分で自覚するまで待つなんてことはしないか。んー……でも、あれだけやってる千種さんなんだから、手くらはいは——あ。あー……もしかすると、そういうことかな。うん」

「もしかすると、どういうことなんだ？」

「教えない。外れてたら恥ずかしいし、当たってたら面白いから」

「なにそれ気になる」

「惜しいなあ。あたしだったら、百瀬君を自分好みに調教することに躊躇はないんだけど」
「……」

なにか怖いことをおっしゃる。いつものこととも言う。

それにしても、十和田さんの発言を聞くにつれて、だんだん自分が情けなく思えてくる。十和田さんから見ると、僕は、リードされないとイケないような男なのだろうか。僕は、自分の哲学でちゃんと動いているつもりなのに。

ずい、と十和田さんは顔を寄せてきた。ちよつと、友達同士としては、近い気がする。

「百瀬君は、千種さんを絶対に離さないって決めたんでしょ。千種さんの本音がわからないんだったら、責任持ってちゃんと聞き出さないと。自分で悩んでも、答えは見えてこないよ。百瀬君が守りたいものは、千種さんが守って欲しくないものかもしれないだよ」

唇を尖らせて、十和田さんは、言った。

近づいてきたぶんか、思わぬ迫力を感じて、言葉が深くまで染み込んでくる。思いもしないことだった。僕が、千種を守るつもりで、実は傷つけることになる可能性なんて。千種との付き合いは長い。ある程度のことには、わかっているつもりだ。具体的に、なにかが間違えていると思ひ当たるような節はない。ただ、間違えている可能性を考えていなかった事自体が怖いことだと初めて気づいて、衝撃を受けていた。

「……気をつけておくよ」

「うん」

まだ衝撃から立ち直らず、思考もまとまらないまま、ほとんど反射で返事を返していた。おそらく考えなしの返事だということは気づいているだろうが、十和田さんにはっこり微笑んで、頷いた。

十和田さんが一歩引いた。僕は、ゆっくりと息を吐いた。

「ありがとう、十和田さん」

「ん、いいよいいよ、代償は別に払ってもらから」

「だから怖いからっ！」

……ああ。

ツツコミを入れると少し落ち着く自分が悲しい。

自然と、苦笑いのような笑いが浮かんできて、なんとなく緊張していた心が解れる。この感情の制御の苦手さは、僕のどうしようもない弱点だとよくわかっている。

「ところでさ、いや、本人にもできればちゃんと言いつもりなんだけど。十和田さんは、千種はどんな僕になってほしいと考えてると思う？」

一応、十和田さんの考えを確認しておきたかった。

僕はもつと積極的に行くべきだと思われているのか、それとも、慎重であること自体は問題ないと思っているのか。

十和田さんは、一瞬間んだあと、真面目な顔で答えた。

「ちやんと勉強していい大学いつていいところに就職して、十分な収入を稼いでくれる百瀬君になってほしいんじゃないかな」

「……あ……うん……そうだね……それは間違いないよね……」

あまりに現実的な答えに、上向きかけた気持ち急転直下である。

こんなところで雑誌を読んでないで勉強しろ的な。正論すぎてなにも言えない。

十和田さんは、そんな僕を見て、ふむ、と言った。

「今のに反論しないのは、結婚もやっぱりそれなりに視野に入れてるってことだね？」

僕の目をじつと見つめて。

さわやかに笑った。

「えっ、あ……違うよ、全然違うよ！ いや、ほら……えっと」

言われてみればその通りで。うまい反論が思い浮かばない。

焦る。超焦る。

えっと。えっと。

「……ど、どっちにしても、ずっと未来の話だから」

「百瀬君の照れ隠しはいつも可愛くて素敵だね！ しかも結局嘘はつけないんだよね。もう、お持ち帰りしたくなっちゃう」

「いやえっと」

「結婚式はちゃんと招待してね？ あー楽しみだなあ、百瀬君のウェディングドレス姿」

「そっち!? そっちなの!?!」

「そしてあたしが攫う」

「やめて！ 割と絵面が想像できてしまうからやめて！」

会話というのは、最後はこうしてドタバタして終わるものなのである。

知ってた。

三月十五日 十六時

「ん……」

小さく開いた口に消えていく、レアチーズ、ムース、スフレの三層構造。

千種が、そのまま溶けてしまいそうなほど幸せそうな顔を見せる。まさしくこの表情が見たくて、僕はここにいて言ってもいい。

とにかく表情に乏しい千種が、この時ばかりは呪いが解けたかのように感情をしっかりと表してくれる。これがまた本当に可愛いのだ。いや、惚気というなかれ。この可愛さは見た人にしかわからない。普段が普段だけに、あまりに希少だということもある。

喫茶店でケーキとお茶を楽しむというのは、高校生のお小遣いでは十分に一大イベントだ。ホワイトデーのプレゼントとしては、ちょうどいいだろう。千種が心惹かれる「期間限定」のチーズケーキだ。この顔を見ることができればいいのなら、むしろ僕にとってもプレゼントだ。

嬉しくてじつと眺めていると、千種と目が合った。

「食べないの？」

「え、あ、いや、うん。食べるよ」

食べるよりも見ているほうが楽しくて、自分のほうを忘れそうになる。なんて、そんなこと、言えない。

チーズケーキを口に運ぶ。柔らかくて、甘くて、美味しい。色々な食感が混ざっていて、贅沢な感じだ。普段こんなケーキを食べる機会などないため、確かに幸せな時間だと思う。十和田さんが作ってくれるお菓子もとても美味しいのだが、学校に持ってきてもらおうという以上、焼き菓子にならざるを得ない。生ケーキというのは、なかなか食べることがないのだ。

ちなみに、その十和田さんにはちゃんとマシユマロを返しておいた。こんなものよりも百瀬君には百瀬君らしいお返しの方があって、と怒られたが、気にしない。気にしないと言ったところで拉致られるときは拉致られるのでなかなか油断はできないのだが。

あとなぜかバレンタインデーに五十嵐からもチョコプレートを受け取っていたので、こっちにも一応クッキーを返している。ルミは本当に律儀だな大好きだぞ、と言われた。たくさんチョコをもらって、ちゃんと全部にお返しを持ってきている五十嵐のほうがよく律儀だと思う。

「はあ……」

しかししかし。

どうしても、この甘い味よりも、甘い切ない声と顔のほうに気になってしまふ。なんでこんなに可愛いんだ。犯罪的だ。ふと、店にいる客みんなが千種のこの可愛さに注目している

のではないかという気がしてくる。いや、それくらいの価値はあるのだ。間違いなくあるのだ。

千種はめつたに感想を言わない。ただ、美味しさを顔で表現してくれる。さぞかし、作っ
た人も嬉しいことだろう。きつとどんなレビューよりも心に響くのではないだろうか。

またケーキを食べるのを忘れてそんなことを考えていると、千種は僕の目を見つめて、薄
く笑った。

「私は美味しいケーキを食べて幸せ。百瀬は私と一緒にいて幸せ。素敵ね」

「……う……いや、うん。否定はしない、けど」

ここで、すつと可愛いよと言えないのが、僕である。百瀬成美である。

きつと千種が僕の立場だったら、そんな言葉だつて簡単に言ってしまうのだろう。僕は相
当に思い切らないと言えなくて、つい、まったく違う方向に話を進めてしまうのだ。

「つて、つまり千種は僕よりケーキのほうが上かつ」

「そんなことないわよ。私も、百瀬とこうして過ごせて凄く幸せよ。百瀬と一緒にだから、ケ
ーキもつと美味しくなるの」

「え……あ……そ、そう、か、うん」

半ば照れ隠しのツツコミに対して、強烈なピツチャー返しを飛んできた。ほら、千種は覚
悟もする暇がないうちに急にまっすぐ突いてくるから、困る。たまには僕だつてかっこいい
切り返しをしたい。できない。

ごまかすようにケーキをまた一口食べてみるものの、さつきまでより甘さを感じない。

「あ」

突然、なにかに気づいたように、千種は小さく声をあげた。

なお、こういうときの千種は、大抵ろくな事を言わない。

千種は手を伸ばして、僕の皿を引つ張って自分のほうに寄せる。と思うと、躊躇なくそこにフォークを差した。自分のがまだ残ってるのに僕のを取るのか、まあいいけど。と思ってる、フォークの先をすっと僕の方に向けた。

「はい」

「え？」

フォークの先には切り分けられた一口サイズのチーズケーキ。

……

えーと、これは。これは、アレだろうか。いや、考えるまでもなく、アレだろう。

「ちよ、ちよっと、待って。待って待って」

「うん？」

「いや……なんで、その、いきなり……」

「ん。あんまり食べるのに集中できてなかったから。これを待ってるのかなって思って」

「違うよ！ 考えてもなかったよ！」

「でも、せつかくだから、ほら」

「……い、いや、だって……だってこれ、千種のフォークで……」

「嫌？」

「嫌なわけじゃ、ないよ、うん、もちろんっ」

「じゃ、はい」

「う……」

フォークの先が突き付けられる。目の前に。

……千種が、どうぞとしているのだから、断るのも問題なのだろうか。いやしかし、平気でできるようなことではない。というか、恥ずかしい。めちやくちや、恥ずかしい。これ絶対見られてるつて。周りから見られてるつて。そしてなんだあいつら公衆の面前でいちやつきおつてけしからんとか思われてるんだ。……知り合いがいないことを祈ろう。

悩んでいても仕方がない。覚悟を決めよう。長くなればなるほど、注目を浴びる。

「じゃ、じゃあ」

「んー」

焦らないように、自然に、体を前に乗り出す。

口を開いて、ケーキをゆつくりとくわえる。

ケーキを口に含んだところで、体ごと引いて、口をフォークから外した。

「美味しい？」

「……うん」

「嬉しい？」

「……う……うん」

「よかった」

千種は、嬉しそうに微笑んだ。

今度のケーキは甘すぎて熱くて、ちよつとめまいがした。

これ以上千種の顔を見るとますますのぼせそうだったので、少しクールダウンするために、視線を外す。本当にどこからか見られていないか気になっていたこともあって、さりげなく近くの席の様子を眺めてみたり。

遠くの席の様子も、ちらちらと眺めてみたり。

人を疑わなすぎるのは、千種の美点でもあるのだが、怖いところでもある。

……いや本当に誤解だぞ。本当に。

千種は僕の皿を僕のほうに押し戻す。とりあえず、甘いお遊びは一口で終わり。

「というか、なんで僕のほうを使ったんだ」

「なに言ってるのよ。自分が減るのは嫌じゃない」

ふと気づいたことをツツコンでみると、当然だと言わんばかりに言われた。……千種理論的には、当然なのかもしれない。僕も損をしたわけではないし、これがきつと正解なのだろう。

千種は楽しそうな表情のまま、自分のケーキに戻った。もう、半分以上が消えている。――フォークは、もちろん、そのままだ。予備なんてない。つまり、僕が食べた後のままの。つて、さっきの衝撃で忘れていたけど、僕も、少し前まで千種が使っていたフォークでケーキを食べたのだ。

「……っ」

だめだ。意識すると勝手に目が千種の唇から離れなくなってしまう。

だって。さつきまで、僕の口にあつたものが。そこに。

さらつと過ぎてしまったが、これは一大イベントではないか。こんな、なんの覚悟もできていないうちに経験してしまうようなイベントではないのではないか。

……いや、間接……キス、で、そんなに身構えた演出をするなんて話は聞いたことがないが。でも、僕たちは、まだ、キス自体体験していないわけ。……うん。まだ。いつかはと思っている。そりゃあ。そんなに焦るつもりはないけど。唇を眺めてると、うっかりリアルに想像してしまう。きつとすごく柔らかなのだろう。しつとりと濡れているのだろう。今だ

つたらきつと甘い匂いが――

「ごちそうさまでした」

「ひゃっ……あ、う……うん」

ちよほど想像が盛り上がってしまったところに、千種の声。

不覚にも変な声が出てしまった。結局ずっと千種を眺めていたことに気づいて、慌てて視線を自分のケーキに戻す。いや、まずは、紅茶だ。気分を落ち着かせるには、こっちだ。

忘れかけていたが、そういえば、姉がいるのだ。きつとこういう僕のいまいちゃイケてない場面はしっかり見ているのだろう。かつこいいところは見ていないのだろう。世の中そうできてくる。……かつこいいところなんて、少なくとも今日は今のところない、ことは、認める。

千種は今日もひたすら落ち着かない僕とは対照的に、相変わらず涼しい顔で紅茶に口をつけていた。僕とほぼ同じタイミングで口に含み、ほぼ同じタイミングでカップを置いた。

「さつきから百瀬がなにを妄想していたか、九割ほどの確信で言えるけど、当ててほしい？」

「……頼む。なにも言わないでくれ」

「残念ね。全昭和区を賭けてもいいくら自信があつたんだけど」

「まさか昭和区の住民も、こんな喫茶店で自分たちの命運が決まろうとしているなんて想像しないだろうさ……」

見つめてくる千種の視線を意識しつつ、遠くで見ているであろう姉の視線も意識しつつ。せめて店を出るときには普通に歩ける程度の冷静さを取り戻していたい、と思いつつ、もう一度紅茶に口をつけた。

しかし、期せずしてというか、なかなかいい雰囲気である。たぶん。ホワイトデーのプレゼントなので、今日は迷わず僕が二人分を支払う日だ。なんとなく、二人分をまとめて自分が払うというこの行為が、少し気持ちいい。先に店を出ている千種に、後から追いつく形。

ああ。悪くない。今こそ、この流れに乗じて、すつと千種の手を――

「ごちそうさま。いい時間だったわ」

「……あ、うん、それはよかった」

微笑む千種に、また胸が弾む。本当に、このプレゼントにしてよかったと思う。美味しかった、ではなく、いい時間だった、だ。なんと嬉しいことか。

――うん。

別にこの流れじゃなくても、機会はいくらでもある。今手を繋ぎに行くと、なんとなく、下心があつて誘ったかのように思われてしまいそうで嫌だし。

この後は、せつかくだからついでに参考書を見てこようということになっていた。まだ、今日は終わりではない。どこかのタイミングで、さりげなくいければ。

例えば、あの角を曲がると、おしやれな雑貨屋などが並ぶ通りに入る。カップルも自然と多くなる。千種も今日のこの雰囲気でカップルたちを意識しだして、そこで僕は手を差し出して。

「……」

――うん。

千種が周囲のカップルを意識するなんてことはないって、知ってた。

本屋に入るまでには、なんとか決められたらと思う。

本屋に入れば、さすがに手を繋いでいる場合ではない。決め打ちでもない限り、片手で参考書探しはできない。どこかい場所はないか、どこかいタイミングはないか。

「はい、到着。さ、探しましょ」

「……あ、うん」

到着してしまったからには仕方がない。

またどこかの別の機会があるさ。

……

そんなわけで、今日はいい雰囲気ケーキを味わった後、気持ちを切り替えて真面目に参考書選びをした、いい一日だったのでした。めでたしめでたし。

三月二十一日 九時二十分

男の部屋に、若い男女が二人きり。

なお、二人は付き合い始めのカップルである。

以上の仮定のもと、二人が行なっている行為を答えよ。

簡単な問題だ。答えは明白。
受験勉強である。

「このパラグラフは Nevertheless で始まっているから、この文章と相反するような内容の文で終わっているのが、この前に繋がる奴だよな」

「今年も私がもらった唯一のチョコは母親からのものだった。せめて妹からくらいはもらえろと思うていた。——というこの内容に繋がる？」

「……まあ、ここの、いかにもナルシーな表現が並んでるこの文章だろう」

というわけで、ついに再来週から受験生である僕たちは、割と真面目に受験生モードに入り始めたのだった。部活動をしていないぶん、逆に明確な区切りができないため、モチベーションが上がりにくいとはよく言われる話だ。そんなこともあって、この春休み期間から、新しいことを始めてみようということになった。それが、この、僕の部屋での勉強会である。

——姉が、珍しく朝から出かけているのは、なにか変に気を遣ったのだろうか。違う。そんなのじゃないんだ。勉強なんだ。

僕も千種も、似たような成績で、正直に言ってどちららもあまり芳しくはない。校内では真ん中よりは上、といった程度でしかない。全国的に言えば十分上位なのだが、県内トップクラスの進学校であるこの学校として期待されるレベルには達しているかどうか微妙なところだ。どちらかが教えるというよりは、教えあう関係になるので、ある意味でバランスはいい。

……やっぱり、真面目に勉強はしないとまずいのだ。五十嵐には、当初から、お前は本気で付き合い始めたら成績下がってくるタイプだから気をつけろと忠告されている。非常に悔

しい進言だが、自分でもそう思うだけに、ここは気合いを入れて、集中しないとイケない。ちなみに、親からも姉からも心配されている。どれだけ信用ないんだ自分。

ノートを取りながら、ちら、と隣に座る千種の様子を伺う。いつもどおりの真面目なといふかなんかの感情もこもっていないさそうな表情で、じっと文章を読んでいる。

どちらかといえど考えながら声を出す癖がある僕とは対照的に、千種は必要なことしか喋らない。とりあえずはお互い問題を解いていくので、どこかで詰まるまではとても静かである。

「B、A、F、D、E、C、Gかな」

「んー……いや、ちょっと、待つて。こっちのほうが先じゃないかな。一ヶ月で三倍になるのであれば、来年のバレンタインデーは実に約十八万倍になって返ってくるはずである、つてほう。ほら、そこで考えた、つてなつて、これだから、この後に実際に実行に移した場面が来るはずだし」

「なるほどね。確かに」

短く言うのと、千種はシャーペンを紙の上に走らせる。ポイントとなる単語を丸で囲って、ひとつとメモを残している。いつ見ても、可愛らしい文字だと思ふ。なかなか、本人の見た目とのギャップは激しい。もつとも、見た目を基準にし始めたら千種はギャップだらけなのだろうが。

それにしても、千種がペンを動かすたびに、揺れる。はつきりと揺れる。その、なにかが。

千種とは長い付き合いだったが、今まで勉強しているところを横から眺める機会などほとんどなかった。こうして、体験してみると、よくわかる、というか、嫌でも目に付く。いや、

今までも一緒にバスケなどしていたのだ。もちろん、気づいてなかったわけではない。が、こうして静かな状態で、しかも、すぐ隣から眺めるとなると、やはり、こう、妙に意識してしまうというか。察して欲しい。

「ごくり。無意識のうちにつばを飲み込んでしまっていた。慌てるが、もう遅い。これだけ静かに勉強していれば、間違いなく千種にも聞こえている。」

「よ、よし、この問題は大丈夫そうだな。次行こう、次」

「そうね」

「ごまかすように意味のない言葉で静寂を埋める。幸い、千種はすぐに短く答えてくれた。そしてまた、淡々と次の問題に取り組む。」

静かな時間がまた始まる。余計なことは考えないで、集中しなければいけない。

「ね」

試験一回分の問題をやりきって、一息ついたところで、千種が短く言った。

「胸、触りたいの？」

「ぶふおっ」

主に窒素で構成される通常よりやや二酸化炭素多めの気体を思い切り吹き出した。気体以外のなにも出てきそうな勢いだった。

「げほ、げほ、と思いきりむせる。」

「な、なな、なに言ってるんだおまつ」

「だって、ずっとちらちら見てたし」

「う……いや……そんなには、見てないつもり、だけど」

表情を変えないまま、千種は人差し指を顎の下にちよんと当てた。

「だいたい、私になにか書き始めたら気にするように見てた」

「……そういうのは、気づいても言わないのが優しさだと思わないか？ もしくは、最初に気づいたときに言ってくれるか」

「休憩時間までは無駄口厳禁って約束してたじゃない」

「……はい。そうでした。そうだけどさっ」

わずかに十数秒間程度の会話で、もう顔が熱くなってきているのがはっきりとわかる。なんだ。なんだこの容赦のない攻めは。

「やっぱり、気になるものなのかしら」

「いや……その……ごめんなさい。なんかもう、ごめんなさい」

「なんで謝るの？」

「えっ。いや……なんか、千種は真面目に勉強してるのに僕は集中できていない的な。邪な心を持っていきます的な。そういうアレで。……うう」

自分が言い訳しているのか謝っているのかもよくわからないままとりあえず喋る。なんだか情けなくて、辛い。なぜ自分で解説しないといけないのか。

千種は不思議そうな顔で僕の目を眺めていたが、しばらくして、あ、と小さく呟いた。

「今のがあれなのね。だからお仕置きして欲しいっていう密かなメッセージ」

「違うよ!? どっからその発想に至ったの!?!」

「百瀬が謝るときはそういうことだって、メグが言ってた」

「違うよ! 全然違うよ! 一宮さんなに言ってるの!?!」

「あとみーちゃんも言ってた」

「十和田さんは言いそうだ……」

「やっぱり百瀬は、そういうのが好きなの？」

「待ってくれちよつと待ってくれ僕にも弁明の機会を与えてくれ！ 畳み掛けないでくれ！
あとやっぱりってなんだ！」

「うん。聞く、弁明。どうぞ」

「えっ」

まさかの素直なパスに、なにも言うことが思い浮かばない。真つ白である。違うよ全然違
うよと言ってしまった以上、それ以上に特に言うことはないのである。改めて否定するだけ
だと弱いし。

「そんなに黙ってたら放送事故よ？」

「実況されてるの!? やめて死んじやう」

「わかった。そっちはいいから、話を戻すわ。胸……」

「待て待て待て、うん、待ってくれ」

「あんなに見てたのに。敵を見つけた那須与一みたいに」

「知らんけど！ 知らんけど絶対にそんなに見てないっ！」

「メグは、よく触ってくるし、なんかすごく嬉しそう。百瀬だつて絶対こんなの放つておけ
ないはずだ、つて言ってた」

「やっぱりか！ やっぱり一宮さんなのか！ まあ待て、誤解を解こう」

「百瀬は、興味ないの？」

「……」

あります。

ありません。

ないことがありえようか。

いやしかし、そういう問題ではないのである。この考えをいちいち言語化しないといけないというのは、実に、羞恥プレイ以外の何者でもないと思うのだが。思うのだが。

「ええと……えつとな。物事にはまず順番というものがあつてだな……」

「まず支払いから？」

「うん。違う。大いに違う。ちよつとここは聞いてくれ頼む」

それは、恋人ではない。恋人のようななにかだ。

「えー……つまり、興味が無いわけでは、ない。もちろん。でも、そういうのは、まだ先の話なんだ。ステップを踏んでいくというか……ほら……まだ、手も繋いでいないわけだし、順番が」

結局今日にいたつてもまだ手も繋いでいないわけ。なんとも、恥ずかしいお話である。

順番を追つて色々とやっていきたいと認めるのも、これもまた、恥ずかしいものだが。

胸は、見ていたのは事実だが、だからといって具体的にどうしようかというわけではないのだ。……したくないわけではない、けど。この微妙な感覚をどう説明したらわかつてもらえるだろうか。いや、つまり、欲は、ある。確実にある。けど、そこは手を出してはいけない領域というか、ここで踏みとどまらないと止まれなくなる一線というか。僕はまだ我慢しないといけないし、千種もまだ受け入れてはいけないのだ。……千種は、僕が本気で望んでいると思つたら、なんでも受け入れてしまいそうな危険性がある。だからこそ、僕は慎重にならないといけないのだ。十和田さんが言うとおり、手くらいならまだしも――

「——？」

突然。

強烈な違和感に囚われた。ものすごく、おかしいことが起きていないか？

真面目な顔でこつちを見てくる千種の目を覗き込む。相変わらず、千種の表情から心を読み取るのは難しい。なんでも読まれてばかりの僕とは大違いだ。

で、あるならば。

はたして、この千種が、僕が何度も手を繋ぎに行くチャンスを狙っていることに、今まで気づいていないなんてことが、あるだろうか？

今日も、千種の胸を気にしていたとはいえ、そこまでじろじろと眺めていたわけではない。それでも千種は明確に気づいている。今までのことを振り返っても、千種は確実に的確に僕の考えなんて見ぬいてきている。なぜ、手を繋ごうと狙っていることだけは気づかないのか。いや——

千種の顔を見ながらも、頭はどこか別のところへ。

ぐるぐる。考える。ぐるぐると。

どこかでおかしなことが起きている。起きているとすれば、ありうる答えはどこだろうか。可能性の連鎖をたどって、網をくぐり抜けていく。

なぜ。

どっちか。なぜか。

誰なのか。理由は。

千種の性格、千種の心、読み解いていく。

そして、たどり着いた。

「……一宮さんか」

「ん？」

僕の眩きに、千種は不思議そうに首を傾げた。さすがに、今の考えまでは表情からは読み取れないだろう。

「千種。唐突だけど、答え合わせをしたい」

「うん？ さっきのぶんは、全部終わったと思うけど」

「勉強の話じゃない。この不思議な現象についてだよ」

「んー。どうぞ」

よくわかっていなさそうな千種だったが、とりあえず話させてくれるようだ。

本当は僕がなにを言おうとしているのかわかっているのかもしれないし、本当にわかっているのかもしれない。読むのは難しいが、どちらかと言えばわかっているに賭ける気分だった。

「順番に確認したい。まず聞きたいのは……千種、僕が最近、なんとかしてチャンスを見て手を繋ごうとしたのは、気づいているな？」

「うん」

第一の選択肢。

千種はあっさりと頷いた。

いざ気づいてみると、この選択肢は迷うまでもなかった。なぜ僕のほうが今まで気づかなかったのかというレベルだ。そうだ、千種が気づかないはずがない。いつだって細かに僕

のことを見てくれているのに。

領いた千種からは、隠し事がバレたという気後れのようなものはまったく感じられない。ただ、聞かれたから普通に答えたという風だった。いつも通り、とも言える。しかし、気づいていたにもかかわらず、それをずっと指摘してこなかったからには、理由があるのだ。必ず。

「じゃ、次だ。千種は、気づいてたなら、すぐに言ってくるはずなんだ。今日みたいに、今みたいに。でも、手のことについては、あっさり気づいてたと言う割に、一回も言わなかった。その理由について考えてみた」

僕が言うと、千種は何度か目を瞬かせた。少し、驚いているように見えた。

千種の驚きどころがわからないのも、また、いつも通りだ。まさか、話がこう展開することを予想しなかったわけでもあるまいに、と思うのだが、千種ならありうる、と思ってしまう。千種は自分のことをあまり理解していないのか、僕をよほど鈍いと思っているのか、どちらかなのだろう。……前者だと思いたい。

「まず、手を繋がれるのが嫌だから、という可能性。——たぶん、これはない」
割と迷ったところではあるが。

僕が今の言葉を言いかけた時点で、千種は首を横に振っていた。とんでもない、と言わんばかりに。安心した。これが正解だったら泣くところだ。

とはいえ、フォークの使い回しまで平気な千種が、そんな潔癖症なはずがない。そんな話は聞いたことがない。手を繋ぐことに対して特別な思い入れがある可能性もあったが、長い付き合いで、そんな素振りを感じたことはまったくなかった。

……あと、特に僕は自分の手が汚いと思ったことはない。

たぶんそんなに清廉潔白ではないけれど。

「となると、なにか意図があつて、気づかないふりをしていた。そして、千種がこういう、読みにくい行動に出るのは、裏に誰かの影響を受けているときだ。誰かから悪意を受けているときはそれをできるだけ隠そうとするし、誰かから僕についてのアドバイスを受けたら、それをしっかりと実行したりする」

千種は、素直にやりたいことをやるようできて、実は他人の影響をかなり受けやすい。芯を通すところは通すが、細かいところでは恐ろしく素直に人の言うことを聞いてしまう。

今回に関して言えば、悪意が影響している可能性は低いだろう。つまり、僕と付き合っていることを知られたくない理由がある、例えば——誰か、付き合いを反対する人に監視されているとか、そういったものではないはずだった。手を繋ぐこと以外に関しては、まったくのノーガードだ。こうして、僕の部屋まで平気で来ている。

さて、となると、誰かが、なにかを吹き込んだのだろうか。

「ここまで来ると、もう二択だ。一宮さんか、十和田さんが、なにか千種に言ったんだろう。でも、十和田さんじゃない」

ここで思い出すのが、先週コンビニで十和田さんと会った時の会話だ。彼女は明らかに、手くらいすぐに繋いでしまえばいい、といった感じだった。そして、なにより、千種が主導しないことを不思議がっていた。今回の件の裏に、十和田さんの姿はない。

一宮さん、千種がいうメグは、千種にもっとも近いところにいる女生徒だ。どうも、僕たちが付き合いたしてから、なにかと千種に吹き込んでいる節がある。どう考えても本命だ。

「一宮さんが、僕が手を繋ごうと狙つても気づかないふりをしろと千種に言っていた。これが正解だな？」

「うん」

突きつけるように、言った。

今度もあつさりど、千種は頷いた。

割とドヤ顔気味で言ったのが、ちよつと恥ずかしい。

「……でも、なんでだ？」

推理ができたのは、ここまで。理由となると、さっぱり検討がつかない。

一宮さんの意図は、どこにあるのだろうか。

「一応確認しておきたいんだけど」

「うん」

「一宮さんは、手を繋ぐなって言ってた？ それとも」

「さつき百瀬が言った通りよ。気付かないふりをしておけ、ってだけ」

「……なんで？」

どうやら、手を繋ぐこと自体に反対しているわけではなさそうだった。もつとも、一応確

認してみたとはいえ、手を繋ぐなんて言葉に、千種が従うとは思えなかった。千種が従っ

ているからには千種自身が納得する理由があつたはずだ。

千種は、少しだけ考えるような仕草を見せてから、答えた。

「それは、秘密」

「えー……ここですかよ」

「悪い理由じゃないわよ。でも、私は驚いてるわ。ここまでたどり着いてるのに、一番簡単

なところがわからないっていう百瀬に」

「……簡単なのか」

「とつても簡単」

ふふ、と、千種は笑った。それはそれは、楽しそうに。

あ、可愛いな、と素直に思ってしまう笑みだった。

「面白いわね。中途半端なところまでわかって止まってしまいうから、逆に間違えてしまうのね。いつそずっと気づかないままなら、まだ百点満点もあったのに」

「む……」

千種の言葉の意味がわからない。悔しい。

悔しいが、どうやら、なにかを間違えたらしい。

「僕は、なにか、試されたのか？」

「ううん。私はそのつもりはなかった。ただ、待ってただけ」

「……」

一瞬の間を置いて。

ああ、本当にバカなんだな、自分は。そう気づいた。

本当に、一番簡単なところだった。

——急に、さっきまで推理を披露していた自分が、恥ずかしくなってきた。千種が驚くわけだ。本当に最後の答えまで気づいていたのなら、あんな披露なんてしない。

答えに気づいていたのなら——

「千種」

僕は小さく言うのと、千種の手を両手で握った。

千種は驚きもせず、微笑んだ。

「今日は駅まで送るよ。……こうやって、帰ろう」

「うん。ありがとう。嬉しい」

気づいていたのなら、ただ黙って手を握る。それが正解だった。

明らかに、タイミングは今まで狙っていた中でも最悪だった。それでも、これ以上遅らせるのは、どう考えてももつと悪い。

なにもかも、千種からではなくて。

僕から動くのを、待っていた。それだけだったのだ。

自分のバカさ加減が情けなくなりつつも、しかし、仕方ないだろう、とも言いたくなる。いや、まだ僕は、千種を理解しきっていないなかつたということか。

おそらく一宮さんは、要するにたまには僕がちゃんと主体的に動くまで待てと言いたかつたのだらう。手を繋ぐことに關しては、一宮さんはずっと前から僕がそれを狙っていることに気づいていて、一例として挙げたつもりだったのだらう。

まさか千種が、部屋に上がったたり、間接キスだつて平気でやってしまつたり、胸を触りたのかなどと真面目に言いながら、手を繋ぐことだけは僕が動くまでずっと沈黙を保つなどという、曲がりまくつた変化球で来るなんてことは、一宮さんにも予想できていなかったのではないか。僕だつて、読めやしない。

——まあ、すべては、僕がヘタレてるからだ。そこに尽きるとは思うが。千種は、握つた手を見つめながら、小さく首を傾げた。

「このままの勢いで、胸まで来るのかと思った」

「しないよっ！ それは最悪の選択だろ！」

「そうなんだ。覚悟はしてたのに」

「……」

……千種は、こういう、ヤツだ。

ゆっくりと、息を吐く。

「……頼む、千種。それ以上は言うな。僕だって、無限の理性があるわけじゃない」

「理性がなくなったら、どこまでしちやうの？」

「頼む。やめてくれ、本当に。これ以上情けない状態にはなりたくない」

「うん。わかった」

千種は切羽詰まった僕の言葉に、素直に頷いた。

嬉しそうに。

「百瀬が、どれだけ私のことを想ってくれているか、心配してくれているか、我慢してると

か、わかった。よかった」

「……」

千種の言葉に、苦笑いを浮かべそうになる。

きつと、僕の妄想が、僕の欲が、どこまで向かっているかなんて、千種には想像できてい

ないだろう。きつと千種が思っているよりも、ずっと醜いものだ。よかった、なんてとても

言えないくらい。

「いつも、ありがとう。百瀬が私のことを想って慎重になってくれるのは、わかってるよ。

手のことだって、私が怖らがないようにって想ってくれてるからでしょ？ でも、いっぱい

我慢させてるよね、ごめんね」

「……いや。大丈夫だよ。僕だつて世間のことそんな詳しいわけじゃないけど、付き合ひ始めてすぐに色々と手を出すのを我慢出来ない男のほうが、おかしいと思う。心配しなくても、そんなに辛いものじゃないよ。……その、未来を楽しみにするのは」

我ながら、含みのある表現だと思ふ。

さすがに恥ずかしいことを、そんなまつすぐに言えはしない。

「そっか。私も同じ。いつかはこんなことするんだろうな、なんて考えるのも、ふわふわして、気持ちよくて、幸せ」

千種は、ほんの少し恥ずかしそうに、微笑んだ。

僕が言葉の意味を理解するより早く、千種は動いて、僕の頭を胸元で抱えるように、抱きしめてきた。必然的に、柔らかいものが、顔に当たる。……あつという間に、顔が、心が、沸騰した。

「でも、あんまり我慢ばかりさせてるのも嫌だから。これ、嬉しい？」

「……お、おい……千種、おま……」

いきなりすぎてパニック状態で、なにを言えばいいか、わからない。

ひとつ確かなことは、とても、気持ちがいいということだった。

顔と心臓、体全体は興奮しつつ、でも頭の中でどこか呆れつつ。なんとか、言葉を、ひねり出す。

「……これも、一宮さんだろ、こうすれば喜ぶとか言われたんだろ……」

「うん。だつて、私、どうすれば百瀬が嬉しいか、あんまり自信がないから」

「えつと……えー……あんまり、人の言うことを、なんでも、信じないほうがいい」

「嬉しくなかった？」

「嬉しい。はつきり言つて、天国だ」

「じゃあ、やつぱりメグは正しいんじゃない」

「千種。さつきも言つたと思うんだけどさ……いや、言いかけただけだったかな。……その。我慢つて、さ、遠いところにあるうちは、別に、なにも、問題ないんだよ」

「……？」

頬に当たる千種の柔らかく大きな胸。

頭の上に置かれた手が、僕の髪を優しく撫でる。

……これが天国でなくて、なんだというのだろう。でも、これは天国のようできて、その実、悪魔の誘いなのだ。千種に知ってもらわれないといけないのは、まさにこの二面性なのだろう。

「いやその……前にも似たようなことがあつたことを思い出してほしいような、思い出してほしくはないような……ええと……」

しかし実に、実に。千種はどうして、僕にこんな、恥ずかしいことを言わせるんか。「……このほうが、よっぽど我慢するのは辛くなる」

びたり。

頭の上の千種の手が止まった。抱き寄せる千種の手の力も、弱まった。

僕は、どんな顔をしていいのかわからなかつたが、とりあえず、この一瞬の沈黙の間に、顔を起こした。視線は、千種には合わせない。

顔は見えていないが、千種がなにも言葉を発しないというこの状態は、おそらくなにか気づいたことがあつて、千種も恥ずかしがっているのだろう、ということは、推測できる。

「……とりあえず、今日はもう、勉強のほうに気持ちがあ向きそうに、ない」
「……ごめん」

千種は、珍しく小さな声で、謝った。

「い、いや。気持ちよかったし、正直、得したと思ってる……けど」

フォローのつもりで、本音すぎる一言。

そしてまた、気まづい沈黙である。

んー、んー、と意味もなく唸って、ともあれ静寂を避ける。

「……と、というわけで、あれだ。僕たちはもうすぐ受験なわけで、こういうことも、十分に気をつけていかないといけない、と」

「そう、ね」

千種の言葉も少し歯切れが悪い。

そろそろ僕も気になって、こつそりと千種の表情を覗き見る。……明らかに、赤くなっていた。あ、ダメだ。それを見て僕のほうもまた瞬間沸騰。

「ほ、ほら、えっとさ、先のことを考えるのは、楽しいっていうのは、あるんだ。だからこそ、それを励みに、受験勉強もできるって一面も、あるんじゃないかな」

「……うん」

「た、例えば、目標決めて、目標をクリアしたら一歩ずつ……い、いやいやいなんでもない、ゴールは合格だぞ、うん」

危うく勢いのまま舌が滑って、とてつもなく恥ずかしい提案をしそうになっていた。一歩ずつ、なんだ。なにを言おうとした。なにをするんだ。

千種は、首を縦に振った。どこに、どういう意味で同意したのか、よくわからない。

「少しづつでも目標があるのは、やりがいがあつて、いいかも」

どうやら、僕がすぐに否定したほうだった。

やっぱり千種は恥ずかしそうに、でも少し楽しそうに、言う。

「高い目標を作つて、二人とも達成できたなら、ご褒美はあつてもいいんじゃないかしら」

「……ま……まあ、それも、そう、かな」

「きつと、やる気だつて、出てくるしね」

「うん。間違いなく」

「うん」

千種に釣られるように、僕も、笑つた。笑おうとした。たぶん、うまくいかなくて、変なニヤケ顔になつた。

「うん。具体的なことは、帰つてから考えましょ。今日はもう、勉強にならないんでしょ？」

「……そうだな。間違いなく」

「それなら、今日は、私のことだけ考えて。私も、百瀬のことだけ考えてるから。寝るまで、ずっと」

千種は、そんな言葉を、いつも通りに僕の目をまっすぐに覗き込んで——では、なく、視線を少し斜め下に逸らしながら、言つた。

——このあたりが、もう。僕の意識が正常に保てる、限界だった。

誇張でなく、一瞬記憶が飛んだ気がした。

再び繋いだ手が、僕を現実世界になんとか引き止めてくれた。

手を繋いだまま、千種を駅まで送つた。

今までさんざん悩んでいたのが嘘みたい、簡単なことだった。そして、思っていたよりずっと、幸せなものだった。

そしてこの日は、夜に千種から珍しく電話がかかってくるまで、

『百瀬のことだけ考えてたら、声が聞きたくなかったから』

なんて言われて、どうしようもなく眠れない夜を過ごすことになるのだった。

四月九日 八時十五分

「せーなっ」

後ろから聞こえた声に振り向く。予想通りの顔がそこにあつた。かと思つた時にはもう、千種は彼女に抱きつかれていた。

「おはよー。わー、久しぶりの生せなだー。やわらかいー」

「おはよう。……離れて」

「うい」

千種の冷静な声にも動じず、一宮はしばらくすりすりとして千種の体に顔や腕を存分に擦りつけたあと、ようやく離れた。

「やや、これは運命的だねー。今年からせなとはクラスも離れちゃうのに、最初の日にももちーよりも先に私のほうがせなに会えちゃうなんて。結びつきの強さの違いかな？」

「……」

少し、本気で困ったような顔をする千種に対して、ひひ、と一宮は笑った。

「嘘、嘘。せなとももちーの絆を疑ったりはしないよー。私は二号さんでもいいの。うん」
新学期が始まる日、すなわち、ついに高校三年生としての実質一目目となる日。生徒でゴ
った返す通学路の中で、一宮は最初からこのテンションだった。周囲から好奇の目で見られ
ることなど、意に介さない。この彼女が、生徒会副会長であることを知るものは、少ない。

「で、で、どう？ 休み中になにか進展はあったのかな？ ん？」

一宮は、いつも楽しげである。少なくとも、千種の前では。これで、生徒会活動中は事務
的な作業も淡々とこなすらしいという話を聞いたこともあるのだが、千種には想像できない
姿だった。

「手は、繋いだ」

「おお！ さすがのももちーも、そこくらいはクリアできたんだねー。ちゃんと、待ったん
だよね？」

「……ちよつと微妙」

「あや？」

「ううん。でも、いい。確認できたことも、多いから」

「ふむー」

じー、と。心の底まで覗き込もうとするように、一宮は千種を見つめる。

「いいことあった、みたい？」

その言葉に、千種は少しだけ、考えた。

「あったし、これからあるといいなって思う」

「ふむ？ まあ、そうだろうけどねー」

「メグには感謝してるわ、ありがとうね。やっぱりメグは間違えない」

「おお？ おお？ じゃ、おっぱい揉んでいい!？」

「調子乗らない」

「はい」

「なるほど、成績が上がっていくたび二人の関係もステップアップ！ 一石二鳥ってわけだね。いいねいいね」

「まだ、具体的なことが思いついていないの。なににしたら、百瀬は喜んでくれるのかな」
「んー。真面目に答えると、そゆのは二人で話し合っつて決めたほうがいいと思うけど、ん、でもそうか、せなとももちーの二人に任せてたら、いつまでもいいところに収まりそうにないな。感性が違いすぎるし」

「というか、もちーはせながちよつと大胆なことしないと、いつまでもそんなのはダメだぞ、とか言いそうだよねー、と歯を出して笑いながら言う一宮、そして否定出来ない千種。

「もちーが全国模試で名前載るくらいになつたらさ、ご褒美にはだかエプロンでもしてあげたらいいんじゃないかな、きつともう喜んで全力でしゃぶりついてくるよ」

「はだかテフロン？」

「そう、あなたにさらけ出した裸の心が熱く燃えても、焦げ付くことはないの。だつてテフロン加工だからねってばか！」

びしつとツツコミを入れる手がさりげなく胸元に向かつてくるのを、軽く腕を上げて阻止。明らかに過去に何度も繰り返されたやりとりであることが見て取れる、一連の流れである。

「むう」

一宮は本気で悔しそうに唸った。

「ま、二人とも本番は大学生になってからって認識はできてるみたいだし、そういうのは後でもいいとして。せつかくだから、高校生のうちだからこそ楽しいことをやったらいいんじゃないかなー」

「とうとうと？」

「うーん。……あ、そだ、せなの制服」

「制服？ これ？」

「うん」

ひひひ、とまた嬉しそうにやつく。

「それ、ももちーに着せてあげたら、どう？」

「……百瀬、嫌がると思うけど」

「嫌がつてもなんだかんだでやってくれそうだけだなー。結構、癖になってるんじゃないかな。前回のアレで。せなのなら、サイズもちようどいいだろうし」

「普通に似合いそうだから、ちよつと困るの」

前回のアレとは、数学部の企みで百瀬にメイド服を着せて、しかも知り合い連中で弄びまくったイベントのことである。実際、千種自身も、可愛いと思った。制服も問題なく着こなしてしまいうると思うもの、本音である。

「いやー、いい考えだね。でも、その格好をさせたまま街中を歩かせてからが本番だとあたしは思うな、うん」

——なぜか、ちようどいいタイミングで、その前回の主犯が、後方から現れた。二人が振り向くと、数学部部长、十和田はいよつ、と手を上げた。

「おはようさん！三年になつてからもよろしくだよ」

「おはよう」

「おはよー」

「さて続き、続き。百瀬君ならね、十分に外を歩けるクオリティになるよ、間違ひなく。だつたら歩かせてみたいよね」

「さすがに全力で抵抗すると思う」

「そういうときはね、飴を与えるんだよ。まず知り合ひのいないどこか遠くに行つてから途中で着替えさせるとか、千種さんも一緒に歩くとか、そういう気遣いをして、これができたらこの格好のまま可愛がつてあげるなんて言つたりしてね。もちろんそんなこと望んでないみたいなこと言うけど、本当はちよつと期待してるはずだから。あとは『自分の意思じゃないけど、仕方がない、言うことを聞いておこう』って思わせてしまえば勝ち」

「うーん。相変わらずみやちやん講座はレベルが高いなー」

「そういうのは、よくわからない」

「うん、まあ、千種さんは今はとりあえず、百瀬君が嬉しいと言ふことだけが実際に嬉しいことだとは限らないつて知つておけばいいんじゃないかな。嫌がつてみせても実は……なんて、そんなタイプだし」

「難しいわ。嬉しいなら嬉しいでいいと思う」

「うーん、やつぱり素直すぎるせなは可愛いなーつ。抱いていい？」

「だめ」

「あ、制服着せるの移行に移すときは、ちゃんとあたしも呼んでね。具体的な計画を立てるときはあたしも協力するから——」

エピソード 四月九日 十一時三十分

「——あれ、弟くんじゃない？」

百瀬は、向かいの同級生の言葉を受けて、顔を上げた。

窓の外を歩くのは、間違ひなく弟の姿だった。百瀬は、あちやー、と頭を抱え込む。ここ一ヶ月くらいで、この喫茶店から弟を見かけるのは、実に三度目である。弟が彼女と付き合いだしてから、明らかに行動範囲が被るようになってきている。

最近、生意気にも名大を目指すなどと言いつけている。もし受かったのならば、ますますこの傾向は強くなることだろう。

それにしても、今日も千種と一緒にいる。仲がいいのは結構なことだが、受験は大丈夫なのだろうか。姉としては心配になるものだった。少し前にはこの店の中で思い切りいちゃついていたのも目撃している。舞い上がっているな、と、見ていてよくわかる。

「弟くん、手繋いでるじゃん。ちゃんと進展してるね」

「みただね。この前も家に来てたよ」

「おお！ 順調、順調。お姉ちゃん、ちゃんと応援してあげてね」

「応援はいいんだけどさ、受験のほうが心配だよ」

「そりゃ、確かに。勉強もせずついてる感じ？」

「知るか。んなことまで把握したらんわ。まーでも、春休みは結構勉強してたかなー。部屋でなにしているかまでは知らんけど」

「ま、仮にまずったとしても、成績落ちたら気合いも入るんじゃないの。東丘でしょ、かな

りプレッシャーだつてあるだろうしさ」

「それで、間に合えばいいけどね」

二人して、通りすぎる弟カプルの姿を見送る。

よきかな、よきかな。目の前の彼女は満足げに頷いた。

「青春は青春、しつかり満喫しないとね。ひとつ壁を破つたって感じでもいい雰囲気じゃん」

「まー、ね。あのヘタレにしちや頑張つてるんじゃないかね」

百瀬は呟いて、ゆっくりと息を吐いた。

温かいミルクティを飲み干す。最後の一口だった。

そして、まだ消えていく背中を見て目を輝かせている同級生に向かって、言った。

「じゃ、そろそろ、あいつらを目撃している私たちがいつつも女同士だという現実を認識しようか」

「あーキコエナイキコエナイ」

百瀬の言葉は、大げさに耳をふさぐポーズで跳ね返された。

いつものごとくだった。

いつの間にか弟に色々と負けてる、なんてことにはなりたくないな。そう思いながら、ポ

ットからもう一杯注ぎこむ。

喫茶店は、今日も学生で賑わっていた。

あとがき

ラブコメは好きですか？ イチャイチャは？ ドタバタは？ 可愛い男の子もどうですか？ さあまずは読んでみてください！ きつと楽しんでいただけると幸いです！

→ここまであとがきから最初に読む方用

はじめましてもしくはお久しぶりです！ 村人。でございます。皆様の温かい言葉のおかげで、「ももせな」も続編を出すことができました！ 短編ですが！ 本編ももせなも、素敵な感想をたくさんいただけまして、本当に生きる力になっております。ありがとうございます。ほとんどの方がヒロインの千種さんじゃなくて主人公の百瀬君のほうに萌え転がっていたようにうふふ。新しい世界を開拓された方も。方も？

もし本作から先に読まれて、このキャラたちを気に入っていたら、本編「ももせな」のほうもよろしくお願いいたします。とらのあなさんで扱っていただいております！ 本編もだいたいこんな感じの、ドタバタイチャイチャラブコメです。

さて、本編ではペテン師さまにキャラデザ、表紙および挿絵をお願いしていましたが、今回はテキストが出来上がるのがぎりぎりにならざるを得なかったため、挿絵はなしです。期待された方にはごめんなさい。僕もやっぱり寂しいです！

次回作は未定です。またお会いする機会がありましたら、よろしくお願い致します。

ももせな。アフター 手を繋いで、一歩

発行	2012/05/05 コミティア 100
執筆	村人。(三丁目)
表紙	村人。(三丁目)
サークル	三丁目
連絡先	http://murabito.sakura.ne.jp/scm/
	Pixiv : 138894
印刷	サンライズパブリケーション